

学内広報

2016.4.22

no.1481



入学式で祝辞を述べる梶田隆章先生。



平成28年度役員等の紹介
平成27年度卒業式・学位記授与式
平成28年度入学式・大学院入学式
新コラム「蔵出し!文書館」スタート

平成28年度役員等の紹介

平成28年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長

(任期)平成27年4月1日～平成33年3月31日

五神 真

理事・副学長

保立 和夫

(担当)総務、研究、特定研究成果活用支援事業

石井 洋二郎

(担当)教育、評価

古谷 研

(担当)財務、渉外

南風原 朝和

(担当)学生支援、入試、環境安全、男女共同参画

羽田 正

(担当)国際、資産・施設

理事

境田 正樹

(担当)コンプライアンス・研究倫理、監査、病院

戸渡 速志

(担当)事務組織、法務、人事労務、広報

監事

澤井 憲子

服部 彰

大学執行役・副学長

相原 博昭

(担当)財務改革、学術研究長期戦略

久留島 典子

(担当)学術情報基盤整備

小関 敏彦

(担当)研究力強化

渡部 俊也

(担当)産学連携強化

副学長

神谷 和也

(担当)財務分析・計画

武田 展雄

(担当)柏地区整備、社会連携

田中 純

(担当)人文社会科学振興

千葉 学

(担当)キャンパス・施設

吉見 俊哉

(担当)EMP

副理事

奥抜 義弘

(担当)柏地区整備

紺野 鉄二

(担当)男女共同参画・業務改革

鈴木 敏人

(担当)経理・調達、研究費・研究不正対応

関谷 孝

(担当)教養教育改革

平野 浩之

(担当)財務制度改革

総長室顧問

杉山 健一

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

橋本 和仁

(担当)科学技術制度

藤原 帰一

(担当)国際関係

総長特任補佐

相田 仁

(担当)学部教育、高大接続

伊藤 たかね

(担当)学部教育国際化

大江 和彦

(担当)病院担当補佐

坂田 一郎

(担当)総務補佐、運営企画補佐

関村 直人

(担当)国際

園田 茂人

(担当)国際

高井 まどか

(担当)男女共同参画

武田 洋幸

(担当)広報企画、学術運営企画

中津 健之

(担当)研究企画

難波 成任

(担当)EMP



新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

遠くを見て

新年度から、理事・副学長を務めることになりました。主な担当は、国際と資産・施設です。

十数年前に総長補佐を務めた際に上司だった副学長がおっしゃった「補佐は遠くを見て仕事をしなさい」という言葉が印象に残っています。たしかに、目の前の案件に対処する時、その先のあるべき大学の姿を意識するかどうかで、重点の置き方や処理の仕方はずいぶん異なります。それ以来、私は部局や大学全体の運営の仕事に携わる際には、常に、理想の大学像を思い描くように心がけてきました。

教職員と学生に多様な国際学術交流の機会を提供し、最先端の教育研究を行うにふさわしい建物や設備を整備することが、国際と資産・施設という担当の目標です。そこに一歩でも近づ

くことができるように、毎日の仕事に誠実に取り組みたいと思います。

とはいえ、この二つの領域で事業を活発に展開するには、多額の資金が必要です。自由になる予算に限られる中で、理想の大学に向けて歩を進めることは、容易ではありません。現在、学内で動いている国際と資産・施設関係の事業や計画の全体像をしっかりと把握し、本部や部局の関係者の皆様と十分にご相談しながら、どうすれば東京大学にふさわしくインパクトのある事業を着実に進めてゆくことができるか、知恵を絞りたいと思います。ご支援とご協力をぜひよろしく願います。

理事・副学長

羽田 正

Masashi Haneda



昭和51年3月 京都大学文学部史学科卒業
昭和53年3月 同大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了
(西南アジア史学)
昭和58年6月 パリ第3大学第3期博士 (Ph.D)
昭和61年4月 京都橋女子大学文学部助教授
平成元年4月 本学東洋文化研究所助教授
平成9年9月 同教授
平成21年4月 同所長
平成24年4月 本学副学長・国際本部長
専門分野：世界史
研究内容：1) 羽田正「新しい世界史へ」岩波書店、2011年 2) 羽田正「東インド会社とアジアの海」講談社、2007年
趣味：テニス、歌舞伎鑑賞

監事に就任して

私は弁護士として数十年仕事をしてまいりました。弁護士業界も今いろいろな問題を抱えておりますが、大学という組織もいろいろな問題を抱えていることが先日来各種会議に出席して少しずつ分かってきました。五神総長がそれらの問題に果敢にチャレンジしていらっしゃいますので、側面からサポートしていく所存です。

弁護士の仕事という皆様は裁判所で戦う弁護士像を思い浮かべられることと思いますが、弁護士にもいろいろな仕事があります。私はその中でも企業法務というものに長年携わってきました。これは企業が何かのプロジェクトを進めるにあたってサポートすると同時に、法律上、

あるいはビジネスプラクティス上、あるいは日本の文化などに照らして望ましくない場合には、ブレーキをかける仕事です。外国企業が日本でビジネスを展開するのをお手伝いすることもあります。日本に進出してくる外国企業は、日本では通常どうするのかということ必ず聞いてきます。昔は企業のサポートをする弁護士というのは少なかったのですが、日本経済の発展とともに増えてきました。これはこれで大事な弁護士の仕事と自負しております。

私が弁護士になったときからずいぶん時間がたち、日本社会そのものが変遷してきています。今までの経験を本学のためにお役にたてるよう努力してまいります。

監事

澤井 憲子

Noriko Sawai



昭和46年3月 一橋大学法学部卒業
昭和53年3月 司法研修所卒業
昭和53年4月 弁護士登録。ブラウン・守谷・帆足・窪田法律事務所に入る
平成9年7月 春木・澤井・井上法律事務所設立
平成18年6月 東京丸の内法律事務所と統合し、本日に至る
平成25年12月 東京都労働委員会公益委員に就任。現在に至る

自己紹介と所感

栃木県宇都宮市の生まれ。東大経済学部を卒業以来46年が経ち、再び大学に通い始め浦島太郎のような気分でもある。赤門、安田講堂、法文館、三四郎池など昔の記憶のままの佇まいであるが、新しい施設や建築物もたくさん出来ていて昔に比べると手狭になった感じがする。

キャンパスを遊歩すると、そこここに新しい大学の息吹を感じる。かつて溢れていた大学の立看板はなくなり、掲示ボードには卓越性、多様性、ベンチャー、新領域などといった私たちの学生時代にはあまり関心を持たれていなかった言葉が目に入る。様々な国から学生や研究者が集うようになっていることも実感する。学生食堂を覗くと、

ハラルメニューも用意されているようだ。

私は長年監査法人で監査業務に従事し、退職後、今年3月まで7年ほど私立大学の監事を務めていた。グローバル化、少子高齢化が進み、国の財政悪化に伴い補助金や交付金のカットが続くなかで大学の経営の厳しさは十分理解している。東大はそのような環境であればこそ、どのような考えを有し、どのような歩みをしていか、最高学府として国民から特に注目されており、その分だけ大変なように感じる。

私も国民の一人として東大に大いに期待すると同時に、今度は監事という立場から微力であるが貢献できればと思っている。

「産学協創」のビジョン実現へ

このたび産学連携強化を担当する執行役を務めさせていただくことになりました。

「東京大学ビジョン2020」に掲げられている「知の協創の世界拠点」を実現していくための重要な要素として社会との連携があります。東京大学は国内大学トップの共同研究数や特許出願数、そして約250社の大学関連ベンチャーを生み出してきた産学連携のパイオニアです。しかし「知の協創の世界拠点」の実現のためには、従来の産学連携活動を、より高度化し幅広く発展させることが不可欠です。産業界と大学が同じ方向に向かって密接な協力により新たな社会的価値を創造する「産学協創」というビジョンを実現するべく、産学連携体制の強化を図って

まいります。

企業の知的財産管理やイノベーション戦略を専門として研究を行ってまいりましたが、この10年間は企業の知財戦略が事業戦略と密接に連動するようになったことを背景として、知財管理のあり方が大きく変容した時期でもあります。同様に産業界と密接に連携しようとする大学においても、組織として知的資産を活用するための高度な戦略的管理が求められています。大学のミッションや特徴を踏まえ、大学の価値とそのIntegrityをより発展させるべく、産学連携や知的財産に関する体制強化とシステム改革に取り組んでまいりたいと存じます。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

法人化と財務制度改革

昨年5月に11か月の予定で副学長を拝命し、さらに1年間任期延長になりました。担当は財務分析・計画です。

法人化以前、国の制度に従って運営されていた国立大学は、法人化以後は自らの制度のもとに運営されています。私は、12年前の法人化前後の1年間、本学の総長補佐を務め、法人化後の物件費配分制度案および人件費配分制度案の作成に関わりました。人件費については、当時東大においては定員の部局間貸借関係に加えて、教員の定員概念については、予算定員、配当定員、充員の3つがあり、それぞれの定員の合計数が一致していないという複雑な状況でした。法人化後の人件費配分制度は、この複雑な

状況を解消しかつ研究・教育を活性化することを目的としておりました。しかし、法人化以前と以後をスムーズに接続することも目的としていたため限界があり、2,3年後には改革されることが期待されておりました。しかし、12年を経た現在、抜本的な改革は行われておらず修正が行われたのみです。物件費配分制度に関しましては、おかげさまで今年度より新制度が発足しました。今後は、人件費配分制度の改革が課題になります。

私は、現在神戸大学とのクロス・アポイントメントで来年度からは100%神戸大学に移る予定です。移る前に可能な限り改革案作成に協力したいと考えております。



監事

服部 彰

Akira Hattori

昭和45年4月 東京大学経済学部卒業
昭和52年3月 監査法人中央会計事務所公認会計士
昭和55年3月 クーバース・アンド・ライブランド・シドニー事務所出向
昭和58年9月 監査法人中央会計事務所社員
昭和63年9月 中央新光監査法人代表社員
平成18年9月 みずほ監査法人代表社員
平成19年8月 服部公認会計士事務所代表
平成21年4月 駒澤大学監事
著書：1) 服部彰、青山裕治共著『会社経理の実際』（日経文庫）日本経済新聞社、1993年 2) 高橋浩夫監修、服部彰他共著『トップ・マネジメントの経営倫理』白桃書房、2009年
趣味：絵画鑑賞



大学執行役・副学長

渡部 俊也

Toshiya Watanabe

昭和59年3月 東京工業大学無機材料工学専攻修士課程修了
平成6年3月 東京工業大学無機材料工学専攻博士課程修了(工学博士)
平成10年4月 (民間企業勤務を経て) 本学先端科学技術研究センター客員教授
平成13年4月 本学先端科学技術研究センター教授
平成19年4月 本学国際・産学共同研究センター長
平成24年12月 本学政策ビジョン研究センター教授
専門分野：知的財産・イノベーション
研究内容：1) 渡部俊也「イノベーションの知財マネジメント」白桃書房(2012) 2) 渡部俊也「境界を超えるオープンな知財ライセンス契約—どのようにして生まれ、どのように機能し、どのような意味を持つのか—」組織科学, 第46巻第2号(2012)
趣味：能楽



副学長

神谷 和也

Kazuya Kamiya

昭和56年3月 京都大学経済学部卒業
昭和58年3月 大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了
昭和61年9月 カンブリック大学(ベルギー) CORE研究員
昭和61年12月 イェール大学(米国) 大学院博士課程修了(Ph.D. in Economics)
昭和62年10月 大阪大学経済学部助教授
平成4年4月 同社会経済研究所助教授
平成7年4月 本学経済学部助教授
平成8年4月 本学大学院経済学研究科助教授
平成11年1月 本学大学院経済学研究科教授
平成27年5月 本学副学長
平成28年4月 神戸大学経済経営研究所教授(本学とクロス・アポイントメント)
専門分野：ミクロ経済学、数理計画法
研究内容：1) Kamiya, Kazuya, "A Globally Stable Price Adjustment Process." *Econometrica* 58, (1990): 1481-1485. 2) Kamiya, Kazuya and Shimizu, Takashi "On the Role of Tax-Subsidy Scheme in Money Search Models." *International Economic Review* 48 (2007): 575-606.
趣味：料理

人文社会科学分野の活性化のために

本年1月に人文社会科学振興の担当として副学長を拝命し、このたび引き続き同じ役職を務めさせていただくことになりました。

私に与えられた任務は、五神総長の示された「東京大学ビジョン2020」にうたわれている、「人文社会科学分野のすぐれた研究を積極的に支援することでさらに活性化し、当該分野における東京大学の国際的な存在感を向上させる」ことにあります。

本学はその長い伝統において、日本の人文社会科学を牽引する大きな学術的成果をあげてきました。しかし、あらゆる領域でのグローバル化をはじめとする国内外の急激な変化は、大学における人文社会科学のあり方にも再検討を迫っています。

この分野での本学の卓越性をさらに高め、国際的な求心力をより強化して、多様性を有する人文社会科学分野の研究全体を活性化させるため、次の4点を柱とした取り組みを計画しています。

1. 研究：学術体系の再編や新しい学術を生み出すことをうながす。
2. 次世代育成：本学が長年育ててきた学園で今後も維持すべきものを維持する。
3. 社会連携：人文社会科学分野の学術研究の意義を社会に伝える。
4. 国際発信：世界の研究者に向け、学術情報や議論の場を提供する。

この取り組みには理系分野を含めた全学の皆様のご助言ご協力が不可欠です。何とぞよろしくお願い申し上げます。



副学長

田中 純

Jun Tanaka

昭和60年3月 本学教養学部卒業
平成5年4月 本学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程退学
平成5年5月 本学教養学部助手
平成7年7月 本学大学院総合文化研究科助教
平成13年7月 博士(学術、本学)
平成21年12月 本学大学院総合文化研究科教授
平成22年4月 本学総長補佐
平成26年4月 本学大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長
平成28年1月 本学副学長(人文社会科学振興担当)
専門分野：表象文化論
研究内容：1) 田中純「政治の美学——権力と表象」東京大学出版会、2008。 2) 田中純「過去に触れる——歴史経験・写真・サスペンス」羽鳥書店、2016。
趣味：写真撮影・路上観察

副学長就任にあたって

この度、副学長を拝命いたしました。主にキャンパス・施設を担当することになります。

本学を卒業して以来、建築家として実務畑で仕事をし、大学に教員として戻ってからは、キャンパス計画室の室員として、キャンパスの様々な計画に携わってまいりました。近年では、工学部新3号館や安田講堂の改修など、本郷キャンパスにおける歴史的空間をいかに未来につなげていくか、という観点で設計監修を行い、また、目白台の国際宿舎の計画も進めてきました。

キャンパスは、言わば一つの「都市」です。常に新陳代謝を繰り返しながらも全体性を維持し、未来に向かって動き続ける運動体です。そのために、研究教育拠点として今日的な要請に見合う機能性を最大限に獲得していくことはも

ちろんですが、大学がこれまで経て来た時間を蓄積していくことも、同時に実現されなくてはならないと考えています。このような過去から未来へと続く空間の中に大学の理念が実体化されることで、研究教育活動の基盤はより盤石なものになるのだと思います。

このようなキャンパスを具現化するためには、もちろん財政的な面での適切なバランスが大前提となりますが、同時に日々の維持管理といった視点での検証も今後ますます重要になってくると思われます。その点で、今後皆様方には様々な場面でご理解、ご協力を仰ぐ場面も出てくるかと思えます。微力ながら最善を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。



副学長

千葉 学

Manabu Chiba

昭和60年3月 本学工学部建築学科卒業
昭和62年3月 本学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
昭和62年4月 株式会社日本設計
平成5年4月 本学工学部キャンパス計画室助手
平成8年4月 ファクターエヌアソシエイツ共同主宰
平成10年3月 本学大学院工学系研究科建築学専攻助手
平成13年11月 本学大学院工学系研究科建築学専攻助教
平成19年4月 本学大学院工学系研究科建築学専攻准教授
平成21年8月 スイス連邦工科大学(ETH) 客員教授
平成25年9月 本学大学院工学系研究科建築学専攻教授
専門分野：建築意匠、都市空間デザイン
研究内容：1) 千葉学著「そこにはない形式」TOT出版 2004年 2) 千葉学著「I-peak Manabu CHIBA」equal books 2014年
趣味：自転車

EMPを未来の東大のモデルに

このたび、EMP(エグゼクティブ・マネジメント・プログラム)担当副学長を拝命いたしました。EMPは、企業や官庁で将来の組織幹部になる可能性のある優秀人材を主な対象に少数精鋭で行う特別プログラムです。私はEMPが、次の3つの意味で未来の東京大学のかたちを示すモデルになると考えております。

第一に、EMPは東京大学に息づく幅広く深い知を社会の最前線に立とうとする方々に提供し、企業や官庁との個別の研究プロジェクトを超えた持続的な連携基盤を築きます。

第二に、EMPはすでに約300人の修了生を輩出しています。それぞれの組織でリーダー的役割を果たす人々とのOBネットワークを大切に育て、彼らの経験知や影響力を東京大学の未

来のために活用させていただくことで、東大の経済的、社会的基盤を強化できます。

第三に、EMPは受講生を「先端分野特有の思考プロセスの革新性、多様性に驚きをもって遭遇」させ、各人が「すでに持っている枠組みを見直し、能動的に体系化」させます。新知識を外から与えるのではなく、新しい思考方法に合わせること、すでにある思考法を革新するのです。この教育は、アクティブ・ラーニングやグローバル・リーダー育成など様々なかたちで試みられている学内の教育に通じます。

まだ着任早々の段階で、理解が不十分な点も多いと思いますが、長くこの事業を育ててこられた諸先輩に学び、EMPのさらなるステップを模索していきたいと思えます。



副学長

吉見 俊哉

Shunya Yoshimi

昭和56年3月 本学教養学部教養学科卒業
昭和59年3月 本学大学院社会学研究科修士課程修了
昭和62年7月 本学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
昭和62年7月 本学新聞研究所助手
平成2年10月 本学新聞研究所助教
平成12年8月 本学社会情報研究所教授
平成13年4月 本学大学院情報学環長・学際情報学府長
平成22年4月 本学大学院総合教育研究センター長・教育企画室長
平成22年10月 本学大学史料室長
平成25年4月 本学副学長
専門分野：社会学・文化研究
研究内容：1) 吉見俊哉「都市のドラマトゥルギー」弘文堂、1987年 2) 吉見俊哉「視覚都市の地政学」岩波書店、2016年
趣味：演劇

柏地区キャンパスを開発・整備

このたび、柏地区整備担当の副理事と柏地区事務機構長に就任しました奥抜義弘です。

柏キャンパスは、本学の21世紀における新たな学問の発展に向けた構想に基づいて建設された、本郷、駒場に次ぐ第3の主要キャンパスであり、「三極構造」の中で本学を形作る一極であります。大学院と多くの研究所等を有している柏キャンパスにおいて、研究者間のネットワーク、企業等との連携から構築される社会貢献等に関して、これまで培ってきた人材育成の観点から支援させていただきたいと考えております。

本年度から第3期中期目標・中期計画期間に入り、大学独自の管理運営が更に推し進められ

ている中、五神総長が提唱される「東京大学ビジョン2020」におけるアクション3では、「産学官民協働拠点の形成」として、「学術成果を踏まえた新たな価値創造を推進し、これを広く社会に展開するため、産学官民の連携による協働拠点を形成するとともに、これを担うすぐれた人材を育成する」と謳われております。その実現に向けて、柏キャンパスの地域連携、産学連携、国際化活動を積極的に推進できるよう微力ではありますが、尽力していきたいと考えております。

今後とも皆様からのご指導ご鞭撻賜りますようよろしくお願いいたします。



副理事

奥抜義弘

Yoshihiro Okunuki

昭和50年7月 本学採用
平成20年4月 本学本部人材育成グループ長
平成22年4月 本学本部人材育成課長
平成24年4月 東京学芸大学総務部副部長（兼）人事課長
平成25年12月 本学農学系事務部長
平成27年10月 本学副理事（兼）農学系事務部長
平成28年4月 同（兼）柏地区事務機構長

機動的な運営体制の確立を

このたび、経理・調達、研究費・研究不正対応担当の副理事を拝命いたしました。

国立大学法人化後3回目の中期計画を迎え、五神総長の「東大ビジョン2020」に掲げられたそれぞれのアクションも加速的に進行していくものと認識しております。そのなかでも、経理・調達担当としましては、特に「基盤的な教育・研究経費の確保」に繋がるような資金運用や調達効果に関する提案・実行に臨んでいくことが肝要と思料します。市場環境の動向を踏まえた資金運用計画。透明性・公平性を担保した効率的・合理的な利便性の高い調達方式による経費節減効果。等々をキーワードに取り組んでいければと思っています。

一方、これら資金運用や効率的・合理的な調達方式は、当然ではありますが関係諸法規やルールに準拠した適正なものでなければなりません。研究費・研究不正対応担当としましては、リスクマネジメントの見地に立った不正事案が起こらないような環境、いわゆる「防止・発見」を念頭に考えてまいりたいと考えています。

いずれの担当にしましても、的確かつ円滑に進めていくためには、「東京大学ビジョン2020」に掲げられています「機動的な運営体制の確立」に観点を置くことが重要だと考えるところです。そのためにも、皆様からのご支援ご協力を賜りますよう、どうぞ、よろしくお願いいたします。



副理事

鈴木敏人

Toshihito Suzuki

昭和53年3月 千葉工業大学工業経営学卒業
昭和55年10月 本学採用
昭和62年4月 日本学術振興会出向
平成2年4月 本学総務部総務課第二掛主任
平成4年4月 高エネルギー物理学研究所出向（研究協力第一係長）
平成13年10月 本学経理部主計課専門職員（監査担当）
平成16年4月 本学監査室副課長
平成18年4月 本学医科学研究所経理課長
平成21年4月 本学本部調達グループ長
平成23年4月 本学生産技術研究所事務部長
平成26年4月 本学柏地区事務機構長
平成27年10月 副理事・（兼）柏地区事務機構長

「財務 IR」を推進します

このたび財務制度改革担当の副理事を拝命いたしました平野でございます。

平成28年度から本学も第三期の中期目標・計画期間に入ります。国立大学法人化後の12年間において、基幹的な運営財源である運営費交付金は約120億円の削減がなされてきた一方、病院収入の増収や補助金等の外部資金の獲得努力により、事業規模は拡大し続けています。一見すると本学の財務状況は潤沢に思われるかもしれませんが、交付金の削減による若手教員の雇用の不安定化や、建物整備に伴う維持管理費の増大が教育研究経費を圧迫し、種々懸念が生じてきております。

このような財務構造の変革や「国立大学経営力戦略」並びに「指定国立大学」への対応に向け、

財務制度改革が急務であります。

「東京大学ビジョン2020」におけるアクション4の②においては、「基盤的な教育・研究経費の確保」が謳われており、拡大し続ける本学の教育研究活動をより安定的に支えるためには、財源の多元化と経営資源の拡大を促進していかなければなりません。

そのためには、「財務 IR (Institutional Research)」を推進し、そこから導かれたエビデンスに基づき、ステーク・ホルダーに対する財務情報の公開や学内における財務情報の共有を図るとともに、財務制度改革を推し進め、ビジョンの実現に尽力してまいりたいと考えております。

皆様方のご支援ご協力を何卒よろしくお願いいたします。



副理事

平野浩之

Hiroyuki Hirano

昭和57年4月 群馬大学採用
平成2年4月 文部省大臣官房会計課
平成15年10月 本学経理部主計課長
平成16年4月 本学財務部財務課長
平成19年4月 文部科学省高等教育局医学教育課大病院支援室室長補佐
平成21年9月 文部科学省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐
平成24年4月 文部科学省高等教育局医学教育課大病院支援室室長
平成25年4月 九州大学企画部長
平成27年4月 本学財務部長

退任の挨拶

このたび退任された理事・副学長、監事、副学長、副理事の挨拶を以下のとおり掲載します。

透明な予算配分実現は大きな成果

去る3月31日をもって、理事・副学長（総務・財務・渉外担当）を退任いたしました。1年間と言う短い間でしたが、本部並びに全学の皆様には大変にお世話になり、まことにありがとうございます。

昨年4月に五神新体制が発足し、これまでの教育改革の継承・発展、「東京大学ビジョン2020」の策定とその実施が最初の課題でした。財務担当としてはこれまでにない透明な予算配分方法がほぼできたことは大きな成果です。今後、運営費交付金がさらに削減される中で、大学財務構造の抜本的改変、指定国立大学制度、産学連携手法、国際化、長期的施設整備、卓越大学院、若手研究者雇用など重要課題

前理事・副学長 大和裕幸

が山積です。

これまで経験したことのない課題ばかりで、しかも日本の国立大学モデルとなるものです。場当たりの局所的な改革ではなく、大学システム全体についての周到な研究を行って新たな構想を得て、国民のみなさまに示した上で着手するべきものと思います。

東大は国家的な使命を担っており、五神真総長のリーダーシップのもとで全学の合意を得てしっかりと改革が進められると確信しています。東大の発展と皆様のご健勝をお祈りいたしております。

変化が大きい時期の監事として

この度常勤監事を退任し、総長室顧問に復職し主として渉外本部と卒業生室の活動サポートすることになりました。2014年4月から2年間、役員の方々や監査課をはじめとする本部職員の皆さまには大変お世話になりました。

濱田総長の最終年度と五神総長の任期の初年度と、変化の大きい時期に監事を務めさせていただきました。全学的な業務を通して東京大学の組織や人員構成の多様性（規模の大きさ、複雑さなど）に対して監事として如何にその役割を担うのか周りの人の意見を聞いたり、自問自答する日々でした。

楽しい思い出も多くいただきました。附属施設への監事監査のた

前監事 杉山健一

めの訪問です。神岡の宇宙素粒子研究施設、大槌町の国際沿岸海洋研究センター、北見の北海文化研究常呂実習施設など通常では訪れる機会のない場所を訪れることができました。初めてみる施設の内容や現地で働く教職員の皆さまとの会話、私にとって貴重な時間でした。また、監査課の皆さんと月一回の監査課定例会はそれぞれに好きなトピックを披露し合う楽しい、リラックスできる時間でした。

新執行部は『運営から経営へ』そして『透明な意思決定プロセス』へと大きな一歩を踏み出しました。改革へのためめめ努力を期待するとともに微力ながら貢献して行きたいと思っております。

多様性と卓越性を期待しています

6年間皆様方には本当にお世話になりました。

監事就任以前より、工学系研究科の先生方とは折に触れて接する機会があり、企業にいる身ながら大学のことは多少は理解しているつもりでした。しかし、見ると聞くとは大違いで、企業とは異なる責任権限の在り方、コンセンサスを重んじる複雑な決定手続きやその階層性等は、外からは窺い知ることができないものでした。

外部の目線を保つように努力しつつ監査報告という形で様々な指摘をさせていただいたことが東京大学の今後に少しでも役立つこと

前監事 有信睦弘

を願っています。私の方は、学校教育法や国立大学法人法による国立大学の運営上の制限や、その中で大学の在りかた等、多くを学ばせていただきました。また、監査とは関係のない場での様々な方々との交流や、附属施設の監査の折の貴重なお話等、今後の人生の糧となるものを多くいただきました。

最後に、多様性と卓越性によって東京大学がますます発展することを祈念しています。



持続可能な教育体制実現を

前副学長 **森山 工**

学部教育担当の副学長として、1年間をつとめさせていただきました。

この間、学部教育の総合的改革に関連し、主として新年度以降の全学標準授業日程策定の基本方針、および進学選択の新方式のあり方について検討を重ねてまいりました。全学的なレベルでの討議と部局間調整を要する任務であったため、規模の大きい「東京大学」と日々向き合うことになりました。

当初の任務を果たせたのかどうか、任期を終えるにあたって心許なさをぬぐうことはできません。しかし、全学標準授業日程にせよ

進学選択にせよ、今後のさらなる改善のベースとなる基本路線は示し得たのではないかと考えています。曲がりなりにも仕事をできたとすれば、それは関係する先生方、ならびに本部学務課の方々のお力添えがあつてのことだと痛感します。ご関係のみなさまに衷心からの感謝の念を捧げます。

学部教育の総合的改革は、まだ端緒についたばかりです。今後に必要な見直しと調整を図りつつ、持続可能な教育体制が実現することを願ってやみません。

チームワークに感謝

前副学長 **野城智也**

濱田総長、五神総長のもとで3年間キャンパス・施設、TSCP担当として、また前半2年間は高大連携の担当として副学長を務めさせていただきました。

英語圏・アジア圏の有力大学が巨額の資金を投じてキャンパスの拡充を図っているなかで、本学のキャンパスへの投資が教育研究の未来を拓く有効なものとなるようにすることが私の使命でした。心がけたことは、空間の骨格など施設の設計品質については妥協しない一方で、買い方、作り方を工夫して間接的な費用を徹底的に縮減することでした。そのためには、教員・職員、発注者・受注者の垣

根を越えて「良いチーム」を作り叡智を結集することが不可欠でした。そこで、施設部、資産管理部の皆様とともに、前例にとらわれず新しい方式での契約発注やチームづくりに挑戦してきました。着任直後のKAGRAのトンネルでの大出水を皮切りに思いもよらぬ問題が次々と発生しました。また、図書館機能を維持しながら新築・改修工事を進めていくなどの諸課題にも直面しました。

こうした問題・課題を何とか乗り切ってこられたのはチームワークの賜です。在任中、ご支援ご理解ご指導を下さった全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

「世界の東京大学」として

前副理事 **松田成史**

平成28年3月末で、副理事（人事制度改革担当）を退任いたしました。濱田前総長の最後の半年と五神総長の最初の1年間、東京大学の人事制度改革を担当させていただいたことは、望外の幸せでございました。

運営費交付金が削られている中、貴重な人件費を有効活用し、柔軟な人事制度を展開することは、東京大学の教育・研究活動を更に飛躍させる上にも不可欠な課題です。

在任中、微力ではありましたが、クロス・アポイントメントや教授（特例）などの制度を活用しやすくするなど、人事制度の柔軟化に努めるとともに、若手研究者の雇用の安定性と流動性を確保する

方策を進めてまいりました。

また、教員の教育研究を支援するプロフェッショナルな職員の養成にも力を尽くしたつもりです。

いずれも、総長・役員をはじめ、教職員の皆様のご指導・ご支援のお陰で進めてまいることができました。厚く御礼申し上げます。

人事制度改革はまだ道半ばではありますが、今後更に改革が進み、文字どおり「世界の東京大学」として、東京大学がますます発展していきますことを心より祈念しております。

皆様、本当にありがとうございました。

寄附を試みたくなる大学へ

前副理事 **山路一隆**

この2年間寄附募集活動に携わってきましたが、それ以前と通算すると足かけ8年、卒業生活動・渉外活動に従事してきました。

卒業生活動ではコンテンツ提供とネットワーク形成の並行進行で、渉外活動では個人プレー型からグループ制及びセミ計画渉外への移行と、皆様のご理解・ご協力を頂きながら業務を進める事ができ、それなりの結果を残せたかと思えます。

この間、安田講堂修復プロジェクトに関われた事は大変名誉で有り、修復を終えた講堂を安田家の方に見て頂けたことも大きな喜びでした。

今後、多くの大学が渉外活動に注力してくることが予想され、厳しい競争の中で結果を出し続けるには更なる全学的或いは部局連携的取り組みを検討する必要があります。

“寄附者が寄附を試みたくなる大学”へ向けて、皆様のご活躍を祈念しております。

最後に皆様方からの多大のご支援に感謝し、心より御礼申し上げます。

有り難うございました。



平成27年度卒業式



平成27年度卒業式が、3月25日（金）に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部（文系学部）と第二部（理系学部）に分けて行われ、第一部は9時15分、第二部は11時30分に開式しました。

音楽部管弦楽団によるハイドン作曲「交響曲第88番 ト長調」の演奏後、総長をはじめ、来賓の方々、理事・副学長、理事、各学部長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。五神総長から各学部の卒業生代表に、順次、学位記が授与され、卒業生に告辞が述べられた後、卒業

生総代（第一部：経済学部 菊池信之介さん、第二部：工学部 白幡亘佑さん）から答辞が述べられました。

その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終りました。

なお、御殿下記念館（ご家族会場）ではスクリーンに安田講堂内の式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、卒業生のご家族ほか多くの皆さんが式を見守りました。

平成27年度卒業式 総長告辞

私が総長として送り出す 最初の卒業生の皆さんへ

本日ここに学士の学位を取得し、卒業式を迎えられた10学部、2,996名の卒業生の皆さんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。入学後、勉学に励まれ、研鑽を積み重ねてきた皆さんの栄誉をここに称えます。また、この日にいたるまでの長い年月、皆さんの勉学を支えてこられたご家族の皆様方のご労苦にたいし、敬意と感謝の意を表します。東京大学は本年4月に139周年を迎えますが、本学の卒業生は皆さんを含め合計276,762名となりました。

私は昨年4月に総長に就任致しました。皆さんは私が総長として送り出す最初の卒業生となります。そして4月から皆さんは、社会あるいは大学院において、「東京大学の卒業生」として行動していくことになります。皆さんはいま

この場所で、学士の学位記を手にし、大学でのこれまでの生活を振り返っていることでしょうか。

大学という場で自分の進路について迷った人も、それぞれが決めた専門に進んでからは、卒業研究やゼミを通して、学問が持つ力に直接触れることが出来たのではないのでしょうか。学問とは、答えの用意されていない課題に対して、自ら調べ考えたことを論理的に整理し、結論を与えていくプロセスです。知識を吸収することが中心であった高等学校までの学習とはまったく異質な学びの体験であったと思います。そして何よりも重要なことは、生みだされた新しい知識は人類が共有する資産として、永く受け継がれていくということです。もちろん手探りの苦労もあったはずですが、新しい知を自分か真っ先に手にする興奮を感じた瞬間もあったのではないのでしょうか。それがすなわち、学問を先人たちとともに創る喜びです。皆さんひとりひとりが東京大学で何を学んだのか、今ここで反芻し、心に深く刻み込んで下さい。それは皆さん



東京大学総長

五神 真

んのこれからの人生において活力の源泉となるはずです。

本日はみなさんの卒業を祝う場ではありますが、その一方で私達を襲ったあのつらく痛ましい災害の経験を私は今、思いおこしています。大震災の発生から、この3月で5年の歳月が流れました。東京大学においても、この間、多くの教職員や学生がさまざまな復興支援の活動を行ってきました。私は昨年8月末、被災した岩

手県大槌町にある大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターを視察致しました。大槌町の市街地域、陸前高田市、後方支援の拠点となった遠野市を訪ねました。その現場で復興支援ボランティアとして被災地の子供達の就学支援を行っている本学の学生諸君に会うことができました。被災地域は、国による大規模な土木工事がすすめられている一方で、地元が活力を取り戻すには、まだまだ多くの知恵と忍耐が必要であるということを感じました。皆さんの中にも、在学中に復興支援のボランティアに参加した人が数多くいると思います。そこでの体験は、他では得難い学びとして、きっとみなさんの将来の糧になるはずです。東京大学は、これからも、復興にむけた貢献を続けていきます。みなさんにもまた、あの巨大な災害があらわにした私たちの社会の問題が、まだ克服されておらず、解決されていないということを忘れていてほしいと思っています。

卒業する皆さんがこれから船出をする海は決して平穏なものではなく、まさに世界の荒海なのです。皆さんが生まれた20世紀は科学の世紀と呼ばれ、科学技術の飛躍的な進歩が牽引力となって、人類の活動範囲は桁違いに拡大しました。高速鉄道やジェット機といった交通手段の発達、あるいは情報通信技術やインターネットの普及などの恩恵を受けて、人々は国境を越えて日常的に交流できるようになりました。このように科学技術の革新によって、暮らしの質は向上し、人々はより豊かになったことは事実です。しかしその一方で、資源の枯渇、地球環境破壊、世界金融不安、地域間格差の拡大、宗教対立など、地球規模の課題がいくつも顕在化しています。今年になってからの世界情勢をみても、国際的な金融不安に始まり、中東や東アジアの緊張など、世界はより不安定な方向に向かっていくように思えるのです。

これらの課題を解決するには、私たちの知恵はまだ不足しています。紛争の解決やその後の処理の方法は、いわゆる「世界大戦」が終わった70年前と本質的には変わっていません。社会や経済を動かす仕組みはそれほどには進歩していないと言わざるを得ないのです。むしろ突出した科学技術の発展を十分に制御できずに、人間や社会の側が振り回されてしまっているのではないかとさえ思うのです。

社会に貢献し行動する人材 「知のプロフェッショナル」

日本は、科学技術を牽引力とする工業によって戦後の高度経済成長を達成し、先進国の地位を獲得しました。良いものを安くつくり、人々の暮らしに役立てる。オートメーションと品質管理をコアとする高品質大量生産の製造システムは日本発のイノベーションといえるのです。

工業の飛躍的發展の中で、日本では1960年代半ばごろから、大気や河川の汚染、車による排ガスや交通事故といったさまざまな社会的な課題を体験しました。先輩たちは、科学技術を駆使してこれらの課題を克服する道を探ってきました。私が子供時代に釣りを楽しんだ多摩川は当時生活排水等で泡だらけでしたが、現在では鮎が住むほどにきれいになっています。これは、そのひとつの成果とらえてもよいでしょう。

しかしながら、これまでの知識や既存の技術では解決できない問題もあります。21世紀に入って経済の枠組は世界的な規模で大きく変化しています。産業活動のグローバル化が加速度的に進む一方で、国の財政の悪化は止まりません。高齢化と少子化が進行する中で、雇用不安や格差も拡大しています。少子高齢化がそのまま進むと、2050年ごろには、高齢者一人を15歳から64歳の働き手、1.3人で支えなければならなくなると予測されています。多くの国が今後経験する課題を、日本は先取りしているかのように見えます。このような人口構造を持つ未来社会において、教育、社会保障、医療あるいは道路や橋といった公共的な生活の基盤をどのように維持すれば良いのでしょうか。限られた労働力でお互いを支え合うには経済をどのように動かせば良いのでしょうか。社会の仕組みそのものを新しいものに変えていかねばならないのです。皆さんが私たちとともにそのモデルを考案して実践し、それを日本から発信していくことが必要なのです。

このように、知をもって人類社会に貢献し行動する人材を私は「知のプロフェッショナル」と呼ぶことにしました。「知のプロフェッショナル」となるには、まず3つの基礎力を養う必要があります。3つの基礎力とは、「自ら新しい発想を生み出す力」、あきらめず「忍耐強く考え続ける力」、そして「自ら原理に立ち戻って考える力」です。そしてこれらをベースとして、さまざまな人々と連携し、実際の行動に結びつけていかねばなりません。そのためには、「多様性を尊重する精神」とそれをもとに自分の立ち位置を見据える「自らを相対化できる広い視野」が必要です。人々の国籍、性別、年齢、言語、文化、宗教などの違いを大切に、互いの個性の多様性を認めることが基盤となります。広い視野は、自分と異なる個性を尊重するところから生まれてくるものです。そうしてはじめ、自らと異なるものを理解し尊重し、他者と

協調、共鳴する行動に繋がるのです。

東京大学での学びを通じて、この「知のプロフェッショナル」としての資質を備えたみなさんには、立ちあらわれる課題にひるまず果敢に取り組み、人類社会に貢献するための挑戦をこれからも続けていただきたいのです。

社会的共通資本を提唱した 宇沢弘文先生の構想に学ぶ

さて、それならば、経済や社会を動かす新しいモデルを構築していく、そのヒントはどこにあるのでしょうか。そもそも、資本主義や民主主義といった現代社会を支える基本的な仕組みは、人類が長い年月をかけ、知恵を絞って作りあげてきたものです。しかしそれは決して万能の原理ではありません。発生する時代の課題に対峙しながら、知恵を出し、そのつど修正を続けてきたものです。個々の人々が自発的で意欲をもって行動し、その活動の総和が人類全体を平和で安定した道筋にそって、発展に導いてゆくには、どうするべきなのか。それが今、私達に問われているのです。国によるコントロールや市場の原理にただゆだねるのではなく、地球社会をどのように調和のとれた形で駆動できるのかという難問なのです。

じつは1970年代に同じような問題意識を抱いていた日本人研究者がいました。シカゴ大学の教授を経て、本学で経済学を教えられた宇沢弘文名誉教授です。宇沢先生は、本学理学部の数学科に学び、経済・社会の問題と取り組むために経済学に転向した異色の学者です。企業の成長や投資行動という複雑な現象を数学的なモデルで精緻に表現したという業績は世界的に有名です。とりわけ投資関数についての業績は、ペンローズ先生の名前とともに、「宇沢ペンローズ関数」として広く知られています。

宇沢先生が36歳の若さで教授に抜擢されたシカゴ大学は、1960年代の市場原理主義の経済学のメッカでした。市場原理主義は、政府の関与を極力小さくし、人々の自由な活動を駆動力とすれば経済も社会もうまく発展していくという考えです。ところが、宇沢先生は専門の数理的な考察の結果だったのかもしれませんが、その延長上には持続的で安定的な成長はないと感じられていた様です。ベトナム戦争に対する落胆もあり、1968年に東京大学に戻られるのですが、その頃日本では自動車の排気ガスによる公害などが深刻化していました。先生は当時のだれもが疑おうとしなかった自動車の効用を、





学問の立場から徹底的に批判していきます。その真摯な問いは先生自身のライフスタイルとも結びついた行動的なものでした。長い白髭を生やして、白いランニングシャツ姿でジョギングされる光景はキャンパス内でも有名でした。経済学は人々を幸福にするために、社会の医者でなければならないという信念にもとづき、社会的共通資本という考え方を提唱されたのです。人々が共通に利用する教育や医療などが人類を幸福にする根源的な資源であるという考え方です。そして、こうした社会的共通資本は、利潤最大化原理によっては維持しえないものであるということ、宇沢先生は繰り返し強く訴えました。

「知のプロフェッショナル」としての宇沢先生は、卓越した先見性を持って大きな構想に生涯を捧げて挑まれました。しかし、残念なことに、その構想は未完成のまま、先生は一昨年9月に惜しまれつつ亡くなられました。実際に社会と経済を動かす仕組みとするための道筋はまだ明確には見えていないのです。偉大な先輩が思い描いた、素晴らしい着想を発展させて、この社会を駆動する新しいモデルを開発して実践していくことは、次の時代を生きるわれわれに与えられた課題なのです。

偉大な「知のプロフェッショナル」と呼ぶべき先輩は、まだまだみなさんの周りにたくさんおられます。昨年、「ニュートリノ振動」の発見により、ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章教授もその一人です。梶田先生の言葉をおかりすれば、先生の発見は「人類の知の地平線を拡大する」ものです。世界の素粒子物理学者達が20世紀の後半によく完成させた標準理論には修正が必要であるとする実験的証拠を

突きつけたのです。物質や宇宙の成り立ちの根本を支える理論が覆った瞬間です。ノーベル物理学賞の選考委員長のスウェーデン、 Lund大学のアンネ・ルイリエ教授は、「多くの人々に感動を与えるすばらしい業績」と評しています。基礎研究の成果が人々の心を動かすというのは、まさに学問研究の根源的意義の本質をとらえた表現です。このように世界から賞賛を得て日本全体が活気づいたことを、私は非常に嬉しく思いました。この研究は、小柴昌俊先生から、戸塚洋二先生を経て、梶田先生まで40年近く受け継がれたものです。そのような息の長い組織的な研究を東京大学において主導できたことを大変誇りに思います。しかしその背景に、日本が高度成長を遂げ、豊かにかつ平和な国であり続けたこと、そして国民の広い理解によって基礎研究が支えられて継続できたことがあるのです。その支えに感謝することを忘れてはなりません。また、この研究は国内他大学さらには海外からの大勢の研究者や大学院生との連携の中で、初めて実現したものであることも覚えておく必要があります。

世界と手を携え、知を束ねて 新しい社会を創る担い手たれ

皆さんは、先輩たちの後を受け継ぎ、世界中の様々な人々と手を携えながら、難しい諸課題にたいして果敢に挑戦していかねばなりません。その厳しく苦しい作業を成し遂げるために多様な知を束ね、新しい社会を創る担い手となるのです。その力は、東京大学の学士課程を修了したことによって、皆さんに備わっているはずで、みなさんが今手にしている、卒業証書がその証です。これまでの努力に対して誇りをもつと同時に、社会から期待される役割を自

覚して、謙虚な姿勢を忘れることなく、常に前に向かい、挑戦を続けてください。

「卒業」は終わりを意味するものではありません。学びに終わりはないのです。皆さんと東京大学とのつながりは永遠です。東京大学には、いつでも同窓生が集い、互いに成長する機会とそれを支援する資源が揃っています。東京大学は大学院の改革にも取り組んでおり、いったん社会人になったあとでも、その経験を活かして大学院に戻って学ぶことを支援する制度を充実させたいと考えています。

解決すべき問題を見つけたにもかかわらず、どうしても迫り方や解き方がわからなくなったなら、そのときは「知のプロフェッショナル」の集合体としての東京大学を再び利用して欲しいと思います。挑戦すべき問題が見つからず、なにを考えたらいかがわからない場合には、自らもういちど原点に戻ってみてください。知らないことに気がついたとき、新たな学びが始まるのです。

卒業生の皆さんには、今後は様々な場面で、東京大学の作り手の側になっていただきたいと願っています。皆さんの知恵、これから社会で体得する知見は、東京大学をよりよくするための大切な資源です。よりよい教育と研究の環境を備えるために、卒業生だからこそできること、卒業生にしかできないことを是非していただきたいのです。

最後に、卒業生の皆さんが健康であり続けるとともに、これからも東京大学での体験を活かして不断に学び続け、希望に満ちた明るい未来を切り拓くことを祈念します。東京大学は、いつでも、皆さんが必要なときに戻ってこられる場となるように努力します。今日からは、皆さんも東京大学の卒業生として誇りある伝統を背負う一員です。東京大学の歴史が放つ輝きを一層増すように、私たち教職員といっしょに力を合わせて力強く歩んでいきましょう。

本日は誠にありがとうございます。

答辞

(第一部)

経済学部

菊池信之介さん



本日は、ご多忙の中、教職員並びに来賓の方々のご臨席を賜り、このような盛大な式典を催して頂き、誠にありがとうございます。また、卒業生を代表して答辞を述べるという名誉を頂いたことに感謝いたします。

私たちの多くはバブル崩壊後に生ま

れ、「失われた20年」と言われる時代を生きました。インターネットやスマートフォンなど、テクノロジーの発達があり、恵まれていたなと振り返る一方で、生まれて間もないころに阪神淡路大震災を経験し、小学生の時にアメリカの同時多発テロ、中学生の時にリーマンショック、高校生時に東日本大震災と、立て続けに大きな出来事がありました。それらの大惨事を目の当たりにして、私たちはそれぞれ様々な思いを胸に東京大学に入学しました。

そして、それぞれの学部で、たくさ

んの学友に恵まれ、素晴らしい先生方のご指導を賜り、4年間、勉学に課外活動にと励ませて頂きました。私にとっても、高いレベルでの学問の追究は言うに及ばず、海外留学、東大卒の先輩社会人とのプロジェクト、インターン、部活動など様々な経験をさせて頂き、かけがえのない4年間でした。

かの高名な経済学者ケインズの師で、近代経済学の祖であるマーシャルが、ケンブリッジ大学の教授就任にあたり学生に、次のように述べています。

「冷静な頭脳と温かい心を持って、社

会で困っている人たちのために全力で取り組むような人々を多く世に送り出した」。

この言葉は、私の所属した経済学部の授業でもたくさんの先生方に幾度となくお示し頂いたものですが、特に社会科学では、冷静な頭脳がなければ政治的にきわめて偏った分析になりかねず、また、温かい心を忘れてしまえば本来の目的である人々の幸せの追求から乖離した机上の空論になってしまいます。加速する少子高齢化、高まる経済危機のリスクなど、現代社会には

様々な課題があります。それらに対して、進路は多種多様ですが、私たち東京大学の卒業生は、責任と自覚を胸に、冷静な頭脳と温かい心で、協力して取

り組んでいきたいと思えます。最後にになりましたが、本日まで私たちを指導して頂いた先生方、ともに学生生活を過ごした友人たち、いつも応

援し、どんな時でも励まし、味方でいてくれた家族、大学生活を支えてくださった職員の方々、朝早くから大学の掃除を下された用務の方々、いつ

も挨拶を交わした守衛さん、ほかお世話になった皆様に心から御礼申し上げます。東京大学の益々の輝かしい発展を祈念して、答辞とさせていただきます。

答辞

(第二部)

工学部
白幡亘佑さん



本日は、諸先生方ならびにご来賓の方々のご臨席を賜り、このような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。卒業生を代表して、心より御礼申し上げます。また、ただいま、五神総長より告辞のお言葉を賜りましたことに、重ねて御礼申し上げます。

入学してからの4年間を振り返ると一瞬のように感じつつも、しかし1つ1つの出来事を思い返すと、確かにそ

れだけの時間が過ぎ去ったのだと実感するような日々であったように感じられます。

前期課程では駒場キャンパスにおいて多彩な学問に触れる機会を得ました。学問の最前線でご活躍されている先生方による講義はどれも刺激的であり、また優秀な学友と共にした日々は、学問と向き合っていた時間も学問以外の活動に取り組んでいた時間も、とても貴重な財産となりました。

後期課程では各々の興味に従い、専門の道へと進んでいきました。私の場合は工学部システム創成学科に進学し、自然システムの数理解析に関する研究に取り組みました。自然を計算機上に

表現する過程はとてもやりがいがある一方、自分独りの力では困難な部分も多く、教授や先輩方から頂いた確かな助言や同級生との励ましあいに何度も助けられました。また、研究を始めた頃は研究内容そのものに対する好奇心が研究の主な動機となっていました。研究を進めるにつれて自分の研究が他者に良くも悪くもどのような影響を与えるのかを考え続けることの重要性を実感するようになりました。今後はその両者を大切にしながら研究に邁進していきたいと考えています。

今後、私たち卒業生は様々な道へ分かれていき、各々が社会の中でそれぞれの課題に立ち向かっていくことにな

ります。東京大学で学んだことを最大限に活かし、課題の解決そのものに集中しながらも課題の解決が世界へもたらす影響から目を背けることなく、課題の解決を目的としながらも課題の解決は人類の持続的な繁栄の手段にすぎないことを忘れることなく、社会へ貢献していただけるように精進いたします。

最後にになりますが、今日までご指導下さった諸先生方、また私たちの大学生活の様々な場面を支えて下さった職員の皆様々に改めて御礼申し上げます。これまで私たちの成長を温かく見守ってくれた家族に感謝し、これからも感謝し続けることを誓い、答辞とさせていただきます。

平成27年度学位記授与式



平成27年度学位記授与式が、3月24日(木)に、安田講堂において挙行されました。式典は第一部(理系研究科)と第二部(文系研究科)に分けて行われ、第一部は9時15分、第二部は11時30分に開式しました。

音楽部管弦楽団によるハイドン作曲「交響曲第88番 ト長調」の演奏後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し開式となりました。五神総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記が授与され、修了生に告辞が述べられた後、修了生総代(第一部:理学系研究科博士課程 磯江泰子さん、

第二部:公共政策学教育部 専門職学位課程 上田古都さん)から答辞が述べられました。

その後、音楽部合唱団コーラルアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了しました。

なお、御殿下記念館(ご家族会場)ではスクリーンに安田講堂内の式典模様(手話通訳の映像と字幕も表示)の放映を行い、卒業生のご家族ほか多くの皆さんが式を見守りました。

平成27年度学位記授与式 総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとございます。晴れてこの日を迎えられた皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。このたび、修士課程2,949名、博士課程1,039名、専門職学位課程355名、合計で4,343名の皆さんが学位を取得されました。留学生の皆さんはこのうち718名です。皆様か研鑽に励まれ、卒業のこの日をお迎えになったことに敬意を表します。また、ご列席いただいているご両親はじめ御家族の皆様、御友人、御支援頂いた皆様、心よりお祝い申し上げます。これまで長きに亘るご支援に感謝いたします。

卒業生の皆さんは、今学位をどのような思いで手にしているでしょうか。大学院での研究生活での日々や苦勞の数々を思い出されているかもしれません。

東京大学は本年4月に139周年を迎えます。東京大学は創立以来、アジアの地にあって、東西両洋の学術を基礎としながら、独自の学問を生み育ててまいりました。皆さんはそうした歴史を有する本学を大学院の学びの場として選択されました。学部までは、既存の知識を身につけ、学問体系を把握することが主な学びでした。大学院では、自身で設定した課題について、自ら調べ論じ、結論を導き出しました。すなわち、新しい知を自ら生み出すということに挑戦されたのです。それまでの、知識を吸収する学びとは全く次元の違う営みであることを実感されたことと思います。多くの困難もあったことでしょう。しかしその中で、学問の営みに直接触れ、苦勞を上回る喜びを感じるということが出来たのではないかと思います。そして、研究の成果を修士論文あるいは博士論文としてまとめ厳しい審査に合格し、学位を取得することができたのです。その成果は人類共有の知の資産として、永く引き継がれていくものとなります。その証としての学位が今皆さんの手にあるのです。

私は発見、発明、創造、創作などの無から有を生み出す頭脳の活動、つまり、知の活動を通じて人類社会に貢献する人材を「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。皆さんが手にした学位は、まさに「知のプロフェッショナル」としての資格を意味します。その資格を東京大学の名において得たということ、ぜひ、皆さんの生涯にわたる誇りの源泉として、心に留めて置きたいと思えます。資格を得たということは、同時に責任を負ったということでもあります。そして「知のプロフェッショナル」としてなによりも大切なことは、学問に向かう情熱であり、真理に対する謙虚さと誠実さです。学位に相応しい矜持と共に、謙虚で誠実である

ことを忘れないでください。

今日、私達人類は数多くの課題に直面しています。20世紀は科学の世紀と呼ばれ、自然科学は飛躍的に進歩しました。自然科学の進歩は様々な革新的な技術を生みだし、その結果、人類の活動範囲はかつてない規模へと拡大しました。人々は国境を越えて活動し、世界中の出来事を瞬時に知ることもできるようになりました。しかし一方で、人間の行為が地球に回復困難な変化をもたらし、人類の存続を脅かすものになって来ていることも事実です。そのような地球の有限性を、皆が実感する状況にあっても、環境問題の深刻化に人類は歯止めをかけることができているのです。人文・社会科学の研究が進んでもなお、宗教的な対立や国際競争の複雑化は加速するばかりです。人類の英知が生み出した、資本主義や民主主義という人間社会を動かす基本的な仕組みにおいても、その制御が追いつかず、格差や社会の不安定性が拡大しているのです。

東京大学は東京大学憲章にあるように世界の公共性への奉仕を誓っています。逃避したり、傍観したりすることは私達には許されません。本学で研鑽を積んだ皆さんも、「知のプロフェッショナル」として、こうした難題に挑戦する勇氣、情熱、そして自負を持ち続けなければなりません。その思いを胸に、どう行動するべきか。安定した平穏な世界を構築するためには、人類の英知が駆動する新たな社会や経済の仕組みが必要です。私は、それを東京大学が率先して生み出すべきであると考えます。そして、近代の社会や経済の仕組みの中で必ずしも中心的役割を果たしてはこなかった東洋の学問が、その扉をひらく鍵を握るのではないかと考えています。この点においても、東京大学で学ばれた皆さんには大きな可能性があるのです。是非皆さんと共に、世界の難題に挑戦し、行動していきたいのです。

パラダイムシフトにこそ学問の醍醐味と本質がある

昨年春の大学院入学式でも、私は大きな野心と夢をもって未踏の領域に踏み込む「挑戦の精神」の重要性を話しました。学問は、これまで信じられてきた常識に対して、健全な批判や論



東京大学総長

五神 真

理的な思考によって個々の真理や事実をより確かなものとし、新たな知の要素を積み重ねるといふ地道な営みです。しかし、その過程で、従来の「知識」の体系が崩壊し、突如として新たな枠組みが現れる時があります。いわゆる、パラダイムシフトの瞬間です。例えば、梶田隆章先生、戸塚洋二先生のグループがスーパーカミオカンデで発見した「ニュートリノ振動」はその好例です。質量ゼロとされていたニュートリノが実は質量を持つことを示す事実をつかみ、20世紀後半に構築された素粒子物理学の標準理論に修正が必要であるということ突きつけたのです。梶田先生の言葉を借りれば、「人類の知の地平線を拡大」した瞬間で、宇宙の成り立ちの解明にも関わるものとなりました。このような、パラダイムシフトこそが学問の魅力、醍醐味であり、その高みへの挑戦が学問の本質なのです。

このような知の挑戦は、科学技術の世界だけにとどまるものではありません。先ほど述べたように、いま人類には、社会を動かす新しい仕組みを生み出すことが強く求められています。例えば、近年の科学技術の革新によって、扱うことのできる情報量は飛躍的に多くなりました。しかしそれは人類の進むべき方向を照らすというよりも、むしろ霧を濃くし、進路を見えにくくしているかのようです。未来の社会を「良く」するためには、さらに根源的な問題、つまりヒトと社会にとって「良い」とはどういうことなのかということ自体を深く探究しなければなりません。すなわち、学問的挑戦、とりわけ人文・社会科学の学問的挑戦は、今日、ますます重要になっているのです。

ここで、人文・社会科学の知見が社会づくりに貢献した例として、私たちの先輩の偉業をひ



とつ紹介したいと思います。明治初期に本学教授になられた梅謙次郎先生を御存知の方もおられると思います。梅先生は司法省法学校と留学先のリヨン大学を共に首席で卒業された俊英です。その学位論文は1世紀を経た現代でも参考文献として言及されるほどの価値を有しています。キャンパス内の赤門と正門の間には、梅先生の記念碑があり、そこには「民法の大家」と記されています。江戸末期に締結した欧米列強との不平等条約を撤廃するために、民法制定は当時の緊急的課題となっていました。まず、フランスから招聘したボワソナード博士等によって、民法典が起草されました。しかし、日本の伝統的な文化との整合など議論が収束せず、この旧民法と呼ばれるものは公布はされましたが、施行には至りませんでした。その中で、梅先生は、穂積陳重、富井政章両先生と協力して、新たな民法の内容を作り上げました。そこで、梅先生は、民法典の制定それ自体を、社会を「良く」する為の急務と捉えました。そして、知の力を駆使してそれを早期に実現したのです。梅先生が第一義として捉えたのは民法典自体の完全性ではなく、不平等条約撤廃のために、いかに早く民法を制定するかということだったので。このように、社会の現状に対する判断・選択においてこそ、研ぎ澄まされた英知と理性が必要になります。恐らく、皆さんが社会を良くしようとする際にも、折々の状況に応じた、判断・選択を迫られるでしょう。その時には、是非、ご自身の研究や学位論文での経験を思い出してください。文理を問わず、大学院での学びのプロセスは難解な問題に対する判断・選択の連続であったと思います。その鍛え上げた知の力をもって、梅先生のように的確な判断を下すことを通じて社会に貢献することに挑戦してください。私は、それこそが、皆さんと本学が共有する責務であると確信しています。

先人の築いた「知の架け橋」を縦横に渡り、また自ら築こう

さて、ここで学問というものが持っている特性について是非触れておきたいことがあります。それは時間のスケールです。人類社会への貢献とは、その時々々の社会変革だけを意味するものではありません。過去から未来に流れる永い時間スケールの中で、時を超越した真理の深淵を探究することにこそ学問の真の魅力があるのです。

皆さんはピタゴラスの定理をご存知だと思います。

直角三角形の直角を挟む2辺の長さを、 x と y とし、斜辺を z とします。その時、 x の2乗と y の2乗を足すと z の2乗になる、と言う等式です。この定理は数学だけでなく、長さの計量の基本ともなっています。ところで、 x 、 y 、 z がすべて自然数という場合があります。3と4と5の組合せはすぐに思い浮かぶでしょう。このような3つの自然数の組み合わせは無数に存在します。さて、ここでは2乗の和となっていますが、その乗数を3乗、4乗と増やすと、その等式を満たす自然数の解は存在しないという命題があります。これは、17世紀の数学者フェルマーが「証明を得たが書くスペースがない」と、ある書物の余白に書き込んだという命題です。有名な「フェルマーの最終定理」です。この一見簡単そうに見えながらとつともなく論証がむずかしい命題は、360年にわたる数々の挑戦を退けたのちに、アンドリュー・ワイルズというイギリスの数学者によって1994年に証明されたのです。この探究の過程は、「フェルマーの最終定理」の証明に無数の数学者が魅力を感じ、時を超えて連携し、知の地平を協働して押し広げたことの証と言えます。

実は、この過程に本学の数学者も深く関与していたのです。真理探究のクライマックスで本学数学科の谷山豊が言及し、同科の志村五郎が定式化した「有理数体上で定義された全ての楕円曲線はモジュラーである」と言う予想が次かせない役割を果たしたのです。これは、全く異なる二つの数学的概念を結び「知の架け橋」となりました。ワイルズはこの架け橋を初めて渡ったのです。実は、ワイルズが、この偉業の一年前に発表した「証明」には致命的な欠陥が見つかりました。ワイルズはその欠陥を乗り越えようと、孤独な苦闘をしていました。その中で彼が選んだのは、本学数学科出身の岩澤健吉が築いた、解析学と代数学という二つの世界を結ぶ、もうひとつ別な「知の架け橋」でした。そして、その橋を渡るために、他者と連携することを決断したのです。自らがかつて指導した教え子の数学者、リチャード・テイラーを招き共同して取り組み、欠陥を克服したのです。こうしてワイルズは二つの架け橋を渡ることで、360年のあいだ挑戦者を退けつづけた難問を解き、ついに真理に到達したのです。この物語は、純粋な真理探究の魅力を存分に語るものですがそれに加え、「知の架け橋」という、他者との連携の重要性を示す良い例となっているのです。皆さんにも、是非、先人の築いた「知の架け橋」

を縦横に渡り、また自ら築き、他者と連携し、知の地平を押し広げることに挑戦して頂きたいと思います。

国民からの付託にこたえて学問の自由を实践しよう

ここで、学問にとつてもうひとつの重要な要素である「自由」ということについて触れておきたいと思います。もし梶田先生がニュートリノの質量がゼロであるとする標準理論やすぐに社会の役に立たなければならないという要請から自由でなければ、新たな発想を生み出すことが出来たでしょうか。やはり、学問が人類社会に貢献するパラダイムシフトを引き起こすためには「自由」がその前提として大変重要なのです。

しかし、この自由は決して天与のものではありません。本学の活動を振り返ると、139年間の歴史の中で、様々な理由で学問の自由が失われかけたことがありました。

今われわれの前に学問の自由があるのは、自由を尊ぶ伝統と自由に対する情熱とを持って受け継がれてきた先達の努力があったからです。そしてさらに、学問の必要性を理解する社会・国民からの付託が途切れていないからなのです。このことを私達は深く理解し、その付託にこたえる責務として学問の自由を实践する必要があります。

本学でこの自由を享受した皆さんには、ぜひ、「学問の価値」を社会に広く発信して頂きたいのです。梶田先生は1998年6月にニュートリノ振動の確証を得たことを日本で行われた国際会議で発表しました。その翌日、当時のクリントン米大統領は、MITで行われた卒業式で、この発見について「極小の素粒子の性質から宇宙全体の成立ちまでを支配する根源的な理論を変えてしまうかもしれない」と言及しました。「人類の知の地平を押し広げる」という学問の力の価値を物語る逸話です。

私はこの「知の地平を押し広げる力」と、梅先生が示されたような「社会を良くする力」の双方が、学問への自由の付託を支えるものだと思います。この両者は決して対立するものではなく、両者の調和のとれた発展がなければ、私たちが直面している全地球規模の問題に、解を見出すことは出来ないと思います。

さて、皆さんは、これから、本日手にされた学位を携えて世界に羽ばたいて行かれることとなります。頼るべき絶対的な座標のない、多様性のるつぼでの活躍が求められます。「知のプロフェッショナル」として人類社会に貢献する為には、国、地域、性別、年齢、宗教の違いを超えて、様々な人々と連携して行動していかなければなりません。

そのために不可欠なことは、まず自己を他者



の中で正しく捉えることです。手軽なメディアに安易に頼るのではなく、世界の様々な人々からの声や地域の生の状況を意識して知る努力をしてください。他者に対する敬意を忘れず、公正、公平な理解の上で、自他を相対的に認識する姿勢をもってください。それなくして、意義のある連携や協創は生まれません。

また、これらの連携や協創には、皆さん自身が、多様性を担う主体として他者に認識してもらうことが前提となります。そのために、ぜひ、自身の個性を磨き、世界に向けて叫び、主張して下さい。謙虚であることは重要ですが、発信

のない人とは誰も連携することはできません。

皆さんの学位は、「知のプロフェッショナル」として活躍する資格を本学が認めるものであり、東京大学の責務は、そのような皆さんと手を携えて人類社会に貢献することに他なりません。皆さんが新たに必要とされる学問や異分野連携に資するべく、知の協創の世界拠点としての改革を懸命に進めています。東京大学は常に、皆さんと共にあります。卒業は大学との別れではありません。新たな協働の始まりです。どうか、皆さんには、これからも、本学の成長に積極的に関わって下さるよう、心からお願い申し上げます。

ます。

本学を選び、世界に類のない教育・研究を通じて「知のプロフェッショナル」となる資格を得た皆さんが、その矜持と謙虚さを胸に、それぞれの個に一層磨きをかけ、他者に心を砕き、知恵を出し合い協働し、自由な学問への挑戦によって、知の地平を押し広げ、また、人類社会を「良く」することでみなさん自身の人生を輝かせる、そのことを祈念し、私の告辞とします。学位の取得、誠におめでとうございます。

答辞

(第一部)

理学系研究科
磯江泰子さん



今日は、五神真総長並びに諸先生方のご臨席を賜り、このような素晴らしい式典を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして心より御礼申し上げます。また、五神総長からは激励のお言葉を戴きましたこと、重ねて感謝申し上げます。

私たち理学系研究科大学院修了生は、数年前に東京大学大学院に進学してから、自然の美しさに潜む法則性の精密さ、深遠さに対峙し、心身を削って真理追究のための研究に邁進して参りました。私が所属する理学系研究科における研究の特色は、それが「好奇

心に基づく研究 (Curiosity-driven research)」であることです。そのため、私達は独創性の高い研究課題を設定し、最適な解決方法を探り、その目標を達成することが求められました。研究室では自由に研究に取り組むことができました。私は大学院では、小型魚類であるメダカの脳の高次中枢に、ヒトの脳に見られるような「カラム様構造」を見だし、遺伝子工学的手法を用いて、個々のカラム様構造を可視化しました。大学院入学以前は、「知」は学ぶものでしたが、大学院では「知」を創造する立場に変わり、発見する喜びを得ました。これも、先生方が先の旗印の元、私たちの自由な研究活動を暖かく見守りつつも、時に厳しく叱咤激励して下さいましたご指南のお陰です。大学院の研究生活ではまた、先輩や後輩の皆さんとの切磋琢磨を通じて「己を知

る」こともできました。自然だけでなく自分に対しても向き合い、成長することができた大学院の日々は、私にとっては掛け替えのない、贅沢で貴重な時間でした。

さらに東京大学のリーディング大学院プログラムに参加することで、人類発展に貢献できるリーダー像について、深く考える機会を得ました。私の参加したプログラムでは、将来のライフノベーションをリードするために、分野横断型の学際的研究スタイルと国際的連携が重視されました。先端医療の現場でどのような新技術が求められ、自分の研究がそこにどう貢献できるのかを多面的に考える訓練を受けました。また米国への短期留学の機会もいただき、世界と繋がった研究活動の重要性を実感することもできました。

今後、私たちに必要なことは、正し

くこうした国際的リーダーとなるべく、日常の中で不断の努力を怠らず、行動力を発揮し実践を積むことだと思います。卒業後は東京大学大学院修了生としての誇りをもちつつも、慢心することなく自然科学と社会の発展に貢献できるような、強い意志をもって精進して参りたいと思います。

最後になりましたが、今日まで私たちをご指導下さりました五神総長を始めとする諸先生方、職員の皆様、互いに励まし合った、かけがえのない友人や先輩・後輩のみなさん、そしていつも支えてくださったご家族の皆様、修了生一同、心より御礼申し上げます。皆様の益々のご清栄と、東京大学のさらなるご発展を心から祈念致しまして、私の答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

答辞

(第二部)

公共政策学
教育部
上田古都さん



今日は、先生方並びにご来賓の皆様のご臨席を賜り盛大な学位授与式を催していただき、ありがとうございます。また、ただいま五神総長より激励のお言葉を賜りましたこと、修了生を代表して心より御礼申し上げます。

本日ここに集った修了生は、皆それぞれの興味関心を追求し研究・勉学に励んでまいりました。私にとって公共政策学教育部で過ごした時間は、現在の自分の力の限界を知り、新たな思いがけない可能性を見出した実り多いものでした。

大学院では、全ての人々が平和に幸福に暮らせる世界の実現という理想の

下、発展途上国における貧困の撲滅をテーマに、政治経済理論や政策実現過程における合意形成・政策提言手法など現実に即した知識とスキルを学んでまいりました。また、ダブルディグリー制度を利用し米国コロンビア大学国際公共政策大学院に留学し、諸外国の志を同じくする友人達と切磋琢磨する様々な貴重な機会にも恵まれました。留学中に実際の発展途上国で現地政府とともに経済発展に向けた政策提言に取り組むという経験を得られたことは、私にとって非常に大きな糧となっています。

そんな中で何よりも痛感したことは、世界を変えるというのはそう簡単ではないということです。今日の世界は地域紛争や難民問題をはじめ、エネルギー、環境、経済・財政問題など様々な問題を抱えており、そのどれもが私たちの想像以上に複雑で一朝一夕には解決が望めないものです。

英国の首相であったチャーチルの言葉に、“Success consists of going from failure to failure without loss of enthusiasm.”「成功とは失敗を重ねつつ熱意を失わないことにある」というものがあります。この言葉の通り、何

度失敗しても諦めないことこそがこれからの時代を牽引する私たちにとって重要です。粘り強く目の前の問題に真摯に取り組み、ここ東京大学大学院で得たものを最大限社会に還元していくことが私たち修了生の果たすべき責務であると思っております。この責務を誠心誠意果たしていく所存です。

最後になりますが、この日を迎えるまでご指導くださった先生方、支えてくださった職員の皆様、家族や友人の皆様にも心より感謝申し上げます。

東京大学の更なるご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。



平成28年度入学式・大学院入学式



平成28年度学部入学式及び大学院入学式が、4月12日(火)に日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には、約3,000名の新入生と、そのご家族など約5,300名、合わせて約8,300名が、午後の大学院入学式には、約2,800名の新入生と、そのご家族など約3,300名、合わせて約6,100名が出席しました。

運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに梶田隆章特別荣誉教授・宇宙線研究所長が登壇し、10時40分開式となりました。

式では、はじめに音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、小川桂一郎教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、梶田隆章特別荣誉教授・宇宙線研究所長から祝辞がありました。その後、入学生総代

湯谷猛磨さん(文科II類)による宣誓が行われました。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時40分に式を終えました。

午後の大学院入学式は、13時25分から運動会応援部による演舞、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の芳賀徹名誉教授が登壇し、14時20分開式となりました。

式では、音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、岩村正彦法學政治学研究所長が式辞を述べました。式辞の後、芳賀徹名誉教授から祝辞をいただきました。その後、入学生総代森迪也さん(数理科学研究科)による宣誓が行われました。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時30分に式を終えました。

平成28年度入学式 総長式辞

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。ご列席のご家族の方々にも、心からお慶び申し上げます。

本日入学された皆さんは3,146名です。うち、女子学生は615名、外国人留学生は40名です。

皆さんは、一般入試、推薦入試、外国学校卒業生の特別選考など、多様な入学試験を経て入学されました。それぞれ試験の手応えは如何だったでしょうか。私たちは知識の量ではなく、基本となる知識を柔軟な発想によって使いこなす力こそが大学での学びへの備えとして最も大切だと考えています。そのよう



東京大学総長

五神 真

な期待を込めて出題させて頂きました。その期待にしっかり応えてくださった皆さんをここに迎え、これから仲間として共に活動できることを大変嬉しく思っています。皆さんが、東京大学の資源を存分に活用し、充実した学生生活を送り、自らをいっそう鍛え、大きく成長することを願っています。そして日本全国あるいは世界の各地から集う仲間と、競い合いました信頼しあう人間関係を築いてください。それは、これからの皆さん自身の人生はもとより、社会全体にとっても貴重な財産になると私は信じています。

ここで、皆さんの新しい生活と学びにむけて、少しアドバイスをさせていただきたいと思います。

前期日程試験合格発表の翌日、3月11日で、あの東日本大震災から丸5年が経ちました。皆さんの中にも、被災地出身の方、あるいは知人や親戚が罹災された方がおられるでしょう。中学生のときに震災を経験し、復旧と復興の中で、困難を乗り越えて勉学に励まれたことに敬意を表します。

私は昨年4月に総長に就任致しました。8月末には、大地震で被災した岩手県大槌町にある大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターの状況を視察に向かいました。その際に、大槌町の市街地域、陸前高田市、後方支援の拠点となった遠野市も訪問致しました。そこでは国による大規模な土木工事が進む一方で、地域の人々の活力を取り戻すにはまだまだ多くの知恵と忍耐が必要であるということを感じました。復興はまだ道半ばです。私たちはそのことをしっかり心に留めて置かねばなりません。

東京大学でも、これまで多くの教職員や学生がさまざまな復興支援の活動をしてきました。これからもそのような活動をしっかり続けたいと考えています。新入生の皆さんにも、機会を捉えて復興支援の輪にぜひ積極的に加わって頂きたいと思います。

日本は西洋文明をたんに模倣したわけではない

東京大学は1877年に創立され、本日、139周年を迎えます。昨年は第二次世界大戦の終結から70年目の年でした。つまり東京大学



の歴史は、終戦をほぼ真ん中に挟んで前後とも約70年を数えます。東京大学が創立された当時、日本は、西欧列強に伍した国となるために、西洋文明を取り入れて、近代国家の形を創ることが急務でした。その為、各方面の外国人教師を招き、高等教育の近代化を急ピッチで進めました。本郷キャンパスでは、草創期に力を尽くして下さった外国人の先生方の銅像をあちこちに見ることができます。

しかし、西洋文明を、たんにそのまま模倣したわけではありません。1886年、帝国大学令が公布され、工部大学校が東京大学に統合されました。当時世界では、工業に必要な技能は総合大学ではなく、工科学校等で教えることが一般的でした。東京大学はいち早く「工学」を学問として位置づけ、世界初の試みとして、総合大学のなかに組み入れたのです。最先端の自然科学と連動させ、高度な技術を生みだし、それを社会に活用するという学問の形それ自体が、世界に先がけた独自の発想だったのです。

その工学部が整備した数学の教育システムは、高度な技術力と思考力を有する人材育成の重要な礎となりました。20世紀初頭に見いだされ、物理学のパラダイムシフトをもたらした量子力学という学問があります。1920年代から工学部の力学教室で、理論物理学者たちがこの量子力学に基づく先端研究を行いました。第二次大戦後には、東京大学で数学や量子力学を学んだ多くのエンジニアが半導体エレクトロニクス等の新産業の立役者として活躍したのです。日本が戦後、工業立国として世界屈指の経済力をもつことになったのは偶然ではなく、歴史的必然であったのです。

20世紀において、科学技術の飛躍的な進歩を牽引力として、人類はかつてない大きな力を得て、その活動範囲は桁違いに拡大しました。特に交通、通信技術の進歩さらにはコンピュータやインターネットの普及によって、人々は国境を越えた交流をリアルタイムで

えるようになりました。これらの技術革新によって、人々の暮らしの質が向上し、より豊かになったことは事実です。しかしその一方で、資源の枯渇、地球環境破壊、世界金融不安、地域間格差、宗教対立など地球規模の課題は深刻さを増しています。人類は科学技術によって大きな力を得ることが出来ましたが、その力を十分に制御する知恵はまだ足りないのです。科学技術自体は課題を解決しません。それを活用し、解決に向かわせるのは人です。皆さんには、大きな課題にもひるまず積極的に取り組む人に育ってほしいのです。

このような、知をもって人類社会に貢献する人材を私は、「知のプロフェッショナル」と呼ぶことに致しました。「知のプロフェッショナル」の「知」とは、知識、知恵、知能の「知」です。皆さんが「知のプロフェッショナル」となるために、これから述べる3つの基礎力を養っていただきたいと思います。

「知のプロフェッショナル」になるために3つの基礎力を

第一の基礎力は、「自ら原理に立ち戻って考える力」です。この力は、情報量の増加と学問の細分化が進んだ現在、ますます重要になっています。

情報通信技術の急速な発達には知識の集積や流通といった学問の基盤をも大きく変質させています。書物にあたなくても、スマートフォンやパソコンを使って一通りの情報を瞬時に得ることができるようになってきました。流通する知識の総量は指数関数的に増え、爆発しているかのように見えます。しかし、真の知識は人が自ら経験し思考することによって生みだされるものです。従って、その総量が指数関数的に増えるとは思えません。うわべの知識を鵜呑みにして、その洪水に飲み込まれてしまえば、真のプロフェッショナルとは言えません。知の本質を自らの手、自分の頭でしっかりつかむことが求められています。

また、研究の最前線では学問の先鋭化と細

分化が同時に進んでいます。その中で、足場となる基礎が見失われがちです。難しい課題に取り組む中で、複雑に入り組んだ迷路に入ってしまうこともあるでしょう。その迷路から抜け出すには、一段高い視点に立って自らの位置を確認し、原点に立ち帰ることが必要です。その為には、皆さんには、学問の歴史を良く学び、その中で学問体系の骨格をしっかり捉えてほしいと思います。そうすることで、自ら原点に立ち戻って課題の本質を見つめ直すことが出来るようになるのです。

第二の基礎力は、「忍耐強く考え続ける力」です。天才の一瞬の閃きによって生み出されたとされる歴史的な発見であっても、実は、殆どの場合、たゆまぬ努力の産物なのです。では、「知のプロフェッショナル」に必要な努力とは何なのでしょう。人が課題に挑戦するとき、最初は解決への道筋や糸口は見えていません。試験問題とは違い、正解があるのかどうかということさえ分からないのです。このようなとき、あきらめず考え続けることが大切です。考え続ける期間は年単位に及ぶことも稀ではありません。その持続力をまず鍛えて下さい。その糧となるもの、それは「学問の楽しさ」です。

第三の基礎力は、「自ら新しい発想を生み出す力」です。オックスフォード大学のマイケル・オズボーンらは「雇用の未来—コンピュータ化によって仕事は失われるのか」と題する研究結果を発表しました。現在人間が行っている仕事の半数が20年後には人工知能やロボットによって行われるだろうと予想しています。しかし、技術がいかに発展したとしても、ロボットができるのは過去の知識をベースとした仕事です。人間には、思いがけない発想によって無から有を生み出す能力があります。本日は、昨年ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章先生から祝辞を頂きます。梶田先生の「ニュートリノに質量がある」という発見は、先生の言葉を借りれば「人類の知の地平線を拡大する」営みです。研究の最前線には、先人によるお手本はありません。

そこで求められるのは、人間に固有の「自ら新しい発想を生み出す力」なのです。これは受け身の姿勢では身につかない力です。

皆さんには、これまでの学びのスタイルをより能動的なものに切り替え、「自ら原理に立ち戻って考える力」、「忍耐強く考え続ける力」、「自ら新しい発想を生み出す力」という三つの基礎力を身につけて「知のプロフェッショナル」となることを目指していただきたいのです。範囲の限られた知識を吸収することとは異なり、三つの基礎力には、要領の良い習得法というようなものは存在しません。目標と意欲をもって、かなりの時間にわたる努力の継続が必要になります。しかし、足を一歩前に踏みだせば、これはつらい作業ではなく、刺激的で魅力的な楽しいことだと感じるはず。皆さんはその扉、すなわち学問の扉を今まさに開こうとしているのです。魅力あふれる知の世界での、皆さんの挑戦、それを私たちは全力で応援したいのです。

さて、三つの基礎力をもって人類社会に貢献する行動をおこすためには、さらに、「多様性を活力とする協働」と「自らを相対化できる広い視野」が必要となります。そこで、この重要な2点について、お話しします。

グローバル化の進行は文化の画一化と表裏一体

私たちが直面している地球規模の課題は、人類の活動の拡大によって、「地球が相対的に小さくなった」ということに起因しています。そして、グローバル化の進行は、文化の画一化と表裏一体なのです。実際、すでに大航海時代において、海上を支配した国、その国の文化による画一化が世界で進んだのです。ヨーロッパの特定の地域文化にすぎなかった宗教や言語が世界各地に強い影響を及ぼし、その結果、民族固有の文化や言語が、多数滅亡してしまったという事実があります。

しかし、私たち21世紀の人類は、個性を

塗りつぶして皆が同じような生活をする社会をめざすべきではありません。私は、グローバル化の中で顕在化してきている問題を解決するためには、むしろ、画一化の対極にある多様性の尊重が不可欠だと考えています。人々が、性別、年齢、言語、文化、宗教などの違いを互いの多様性として尊重し合い、地域や国境を超えて協働する「地球社会」を実現しなければなりません。すなわち、「多様性を活力とする協働」が地球規模で行われることこそ、私たちが目指すべきグローバル化なのです。

今説明した、「多様性を活力とする協働」には、自らと異なるものを理解し、互いの違いを多様性として尊重することが前提となります。そのためには、まず、他者を理解し、他者に心を砕き、そして自分が何者かということをしかりと認識することが大切です。すなわち、「自己を相対化する視野」が必要なのです。

皆さんがこれから学ぶ教養学部には、この「自己を相対化する視野」を獲得するための絶好の環境が整っています。東京大学の特徴として、全ての新入生が文系の学生も理系の学生も、それぞれの専門課程に進む前に、駒場のキャンパスで一緒に学びます。日本全国、そして世界の各地から集まった多様な学生と交流することも、自分の専門分野とは異なる分野の学問に触れることもできます。

教養学部での学びの中で、様々な学問に触れ、後に自らの専門について相対化できる視野をぜひ意識して身に付けておいてください。文系の皆さんは、最先端の自然科学に是非触れておいてください。理系の皆さんは、文化や社会の在り方に関する人類の叡智に是非触れておいてください。

国際的な視野を日常的に持つ習慣を身につけよう

そして教室での講義だけではなく、課外活動や部活動あるいは学生寮での生活などを通して、意識して自分とは異なるバックグラウンドを持つ友人を見つけて交流してください。もちろん学外の人々との交流も大切にしてください。異質な友人との交流は、「自己を相対化する視野」の獲得へと皆さんを導くでしょう。



ところで、皆さんは毎日、新聞を読みますか？新聞よりもインターネットやテレビでニュースに触れることが多いのではないのでしょうか。ヘッドラインだけでなく、記事の本文もきちんと読む習慣を身につけるべきです。東京大学ではオンラインで新聞記事や学術情報を検索し閲覧できるサービスを学生の皆さんに提供しています。ぜひ活用してください。その上で、皆さんにさらにおすすみたいことがあります。それは、海外メディアの報道にも目を通すことです。日本のメディアの報道との違いに注目してみてください。また、世界の中で日本がどのように見られているかということも意識してみてください。私は総長になって以来、世界の多様な人々と話す機会が増えました。その中で世界のとらえ方や、外から見た日本の姿が、私のこれまでの常識とずいぶん違うと思うことが度々ありました。手近な日本の新聞やテレビによる情報だけでは足りないのです。皆さんには、ぜひ、今からそのような国際的な視野を日常的に持つ習慣を身につけてほしいのです。

東京大学は、皆さんが「知のプロフェッショナル」となることを全力で支援したいと思っています。

初年次ゼミナールでは、様々な分野の第一線で活躍する教員が、少人数のクラスで、自らの体験を踏まえながら、大学での学びについて語り、皆さんに学問の世界の醍醐味を伝



えます。

自らが選択して異なる文化や価値観に触れて考える体験活動プログラム (Hands-on Activity)、リーダーとして世界を舞台に活躍する力を開発するプログラム (GEFL)、1年間休学して自ら計画を作り、さまざまな体験活動に取り組むプログラム (FLY Program) なども用意しています。今年度から、トライリングプログラム (TLP) として、これまでの中国語に加えてフランス語、ドイツ語、ロシア語も選ぶことができるようになりました。

これらのプログラムは、大学での能動的な学びへ皆さんがギアチェンジすることを助けるものです。いずれも、自分自身の手で扉を開き、主体的に挑戦することを応援するものです。食わず嫌いでいることも、今興味がわからないからと戻込みするものもつたいないと思います。まずはトライすることから開かれる新しい世界もあるからです。受験時代に英語への苦手意識を抱いてしまった人もいるかもしれませんが、そんな人にこそ、これらのプログラムに参加してほしいのです。世界の人々とコミュニケーションする力は、

これからの皆さん全員にとって必要です。どうかこれらの新しいプログラムを存分に活用し、力を鍛えてください。そして、機会を捉えて、実際に海外に飛び出してほしいと思います。

最後になりますが、皆さんが、他者に心を砕き、知をもって人類社会に貢献する「知のプロフェッショナル」となるためには、皆さん自身の心身の健康が第一です。まず、毎日の朝ご飯をしっかりと食べ、規則正しい生活を心がけてください。そして、得手不得手にこだわらず、自分に適した形で、運動をする習慣を身につけるようにしましょう。運動会、サークル活動や体育実技の時間も是非活用して下さい。駒場キャンパスの運動施設も一層充実させていく予定です。

皆さんがこの東京大学を存分に活用し、「知のプロフェッショナル」として大きく成長されることを楽しみにしています。健闘を祈ります。

教養学部長式辞

新入生の皆さん、私はまず、皆さんが多くの難関を乗り越えて、このたび東京大学で学ぶ機会を得られたことを、心から祝福いたします。また、ご両親をはじめとするご家族の皆様にも、お祝い申し上げます。皆さんはこれからの少なくとも2年間を、駒場にある教養学部で過ごすこととなりますが、私は、教養学部所属する教員および職員を代表して、夢と期待に胸を膨らませてやって来る皆さんを、心から歓迎いたします。

皆さんがこれから過ごす教養学部での2年間は、東京大学では前期課程と呼んでいますが、そこでリベラル・アーツ、すなわち、教養教育の基本的な理念に基づく幅広い一般基礎教育を受け、その間にさまざまな可能

性を模索しながら、自分の専門を決めて、後期課程の学科に進学していきます。専門を決めて入学した人たちは、同じ教育を受けながら、自らの選択の再確認と専門への準備をします。

何をやりたいのかがまだわからないのは当然のこと

その教養学部での2年間は、これをどう過ごすかによってその後の長い人生が変わると言ってもよいほど、大切な期間です。その間に皆さんは、自分が本当に喜びをもって深めていけるものを見出してください。と言われていても、そもそも、自分が本当は何が好きで、何をやりたいのかもわからないという人も少



東京大学教養学部長

小川 桂一郎

くないと思います。しかし、それは、まったく心配することではありません。それどころか、むしろ当然のことです。なぜなら、皆さんのこれまでの人生経験も、学んできたことも、ごく限られたものに過ぎないからです。教養学部に入られた皆さんはまず、自分の世

界を拡げる努力をしてください。それは、できるだけ広い学問分野に触れ、その中に入り込み、迷いを重ねることです。この努力は、すでに進路を決めたつもりの人にとっても必要です。自分の世界が広がると、それまで当然のこととして決めていた自分の進路を見直すことになる可能性もあるからです。教養学部は、皆さんのその努力を、さまざまな形で強力に後押しします。それが、教養学部におけるリベラル・アーツ教育です。

皆さんは、これからさまざまな授業に参加し、また、課外活動にも勤しむこととなりますが、その際に心に留めていただきたいことがあります。それは、自ら直接体験することの大切さです。私はこれを俗な言い方ですが「生（なま）の体験」と呼び、これに対して書物や画像や音声記録などのいわゆる「メディア」を通して得る体験と、はっきり区別しております。その分かり易い例が、音楽の聴き方です。現在では音楽の演奏はCDやネットを通して聴くことが非常に多いのですが、同じ演奏者による同じ曲であっても、生の演奏を聴くと、その迫力や味わい深さに驚くほどの相違があるのに気づかれます。これは、音楽好きの人ならば誰でも知っていることです。

「生」の大切さは音楽の場でも教育の場でも同じこと

私にはこのことに関しまして、深刻な経験が一つありますので、ついでにご紹介しておきます。私の父は、晩年になって認知症を患ってからは、かつて繰り返し聴いていたお気に入りの曲でさえ、機械で再生したものには反応しなくなりました。ところが、老人ホームの広間で私がピアノを弾きながら歌を歌ったところ、それまで不機嫌に黙っていた父が、笑みをたたえて、かつての父のように上機嫌で話し始めました。同じ広間で聴いていた認知症の他の人たちも、生き生きとしゃべり始め、「ふるさと」や「七つの子」などを一緒に歌うこともできました。父は、私が帰るま

で、ご機嫌でした。

その一週間後、私は、また同じ人たちの前で歌いました。歌う前は、前回と同じように、誰もが無表情に押し黙っていましたが、歌い始めると、会場の雰囲気が一変し、一曲歌い終わると、不機嫌であった父も、上機嫌でしゃべり出しました。前と全く同じことが起こったのです。

私は、生の音楽のもつ力に圧倒されました。音楽には人の心と心を深く結びつける力がありますが、それが生まれるのは、音楽が奏でられるその現場で、同じ音を聴き、同じ空気を吸い、同じ空気の揺れを、歌い手と聴き手がともに感じるからこそであると実感しました。

「生」が大切なのは、教育の場で行われる授業も同様です。つまり、授業にはその場に出席して直接体験することが極めて大切であるということなのですが、しかし授業における「生」のありがたさは、音楽ほど簡単には分かりません。というのは、授業の主目的が当該分野の知識体系の教授にあるとすると、それには必ずしも授業を受けることが必要とは言えないからです。たいいてい授業は、その内容がすでに本に書かれていますし、簡単に手に入る講義の動画も増えていますので、そのような本や動画を使って勉強すれば、むしろ、その方が授業に出るよりも効率よく学べるかもしれません。そうだとすると、いったいどうして大学では授業が行われるのでしょうか？少なくとも、なぜ、授業には出席した方がよいといえるのでしょうか？

その理由の一つは、授業で説明を受けた方が理解しやすいことです。一人で本を読んでも理解できなかった難解な内容が、授業で明快な説明を受けたら、すつと理解できたという経験は、きっと皆さんもおありでしょう。

もう一つの理由は、授業に出席すると、それが担当教員と深い心のつながりが生まれる機会となりうるからです。そのことがよく分かるのは、中高生のときに、ある科目が好き

になった理由として、その科目担当の先生が好きだったことを挙げていることです。

東京大学の多くの教員は、それぞれの専門分野の学問の構築に関わってきた研究者です。そのような研究者は、授業においては、単に知識を授けるのではなく、一つ一つの内容について、自身の思いを込めようとするものです。その思いが聴き手に伝わったときに、教員と聴き手の間の心のつながりが生まれます。それが聴き手の間でも共有されることもあります。それは、聴き手である学生にだけでなく、教員にとっても、自らの学問を豊かにし、新たな発見の契機ともなりうるものです。それこそが、「生」の授業の力であり、大学で授業が行われる意義なのです。

授業には学生と教員との相性もあり、また、教員と学生の興味のもちかた、あるいは、必要とされる予備知識のレベルの不一致などのために、個々の学生にとって、深く感動できるような授業はごく限られたものになるでしょう。しかし、教養学部では多様な授業が数多く開講されています。その中から、一つでも心に残る授業に出会えたら、それを通して生涯の師が得られることが期待できるので

駒場での課外活動や友人との「生」の付き合いも大切に

「生」の体験が大切であることは、課外活動についてはもっと分かりやすいでしょう。教養学部では、伝統的に学業だけでなく課外活動も重視されており、きわめて多様な活動が盛んに行われていますが、共通しているのは、誰もが好きなことに打ち込んでいることです。好きなことに没頭するときに得られる高揚感、は、生きる喜びそのものです。また、好きなことに徹底的に取り組み、努力していけば、やがてそれは、自分だけではなく、他の人にも喜びをもたらせるようになることも分かるでしょう。

たとえば、スポーツや音楽演奏は、最初のうちはなかなかうまくできません。それでも、困難を一つ一つ克服してゆくのはとても楽しいものです。努力を重ねてある程度上手にできるようになってくると、自分だけでなく、それを見たり聴いたりしてくれる人にも楽しんでもらえるようになります。これは、他の人との間で深いレベルのコミュニケーション



が成立し、それによって喜びが生まれることを意味しています。そして、これはまさに自ら直接体験するからこそ実現できることです。

自分の思いが深いレベルで他者と共有される喜びは、創造を伴うあらゆる営みに共通します。自然科学、人文科学、社会科学を問わず、研究の喜びは、自分が発見したことの面白さを伝え、それが共有してもらえることにあります。教養学部において課外活動も重視されている理由はここにあります。

最後に触れておきたいのが、教養学部にお

ける友人との「生」の付き合いの大切さです。東京大学の学生は、広範囲にわたって潜在能力が高く、学業に優れているだけでなく、それ以外の才能にも恵まれた個性豊かな人たちが大勢います。ここにいる皆さんは、やがて、それぞれの専門分野の第一線で活躍されることとなりますが、大きな可能性を秘めた皆さんが、将来の進路が決まる前の段階で知り合い、親しくなることができる場が教養学部です。夢と期待で胸を膨らませながらいっしょに入学してきた皆さんが駒場で育んだ友

情は、きっと生涯にわたって続くでしょう。皆さんが、駒場にいる間に、多くの「生」に触れることを通して、良き師と良き友に巡り会うとともに、自分が本当に喜びをもって深めてゆけるものを見出して、その道に進むに十分な基礎を養われることを心から願い、私の式辞といたします。

祝辞

新入生の皆さん、東京大学への入学おめでとうございます。また本日入学した新入生の皆さんを今まで支えて来られた皆さまにもお祝い申し上げます。

学問の入り口に今やっと たどり着いた皆さんへ

本日、私は皆さんに祝辞を申し上げることになっておりますが、私自身は東京大学で学部時代を過ごしていませんので、東京大学での学生生活についての的確に言えないことも多いと思います。そこで、私が科学者として経験してきたことをもとに、思いつくままにいくつかのことを皆さんにお伝えしたいと思います。思いつくままに言いますので、皆さんは私の言うことを全て鵜呑みにする必要はありません。むしろ、そんなことを言うけど独りよがりで間違っているのではないのかと疑って、いろいろな人から話を聞いてみるのが良いかもしれません。また私は長年ニュートリノの観測研究に集中してやってきたので、私の経験から言えることが非常に限られていることもご注意ください。

本日、皆さんは、東大生としての初日を少し緊張とともに、晴々しい気持ちで迎えていることと思います。ここで、忘れないでほしいことは、皆さんは学問の入り口に今やっとたどり着いたということです。今後、大学生生活をどのように過ごすかが非常に大切です。

皆さんが高校時代を思い返せば、与えられた問題を、いかにきれいに無駄なく解いて、

正しい答えを制限時間内に導くかが問われていたと気づくかと思います。しかし、学問あるいは科学研究の世界では、答えがあるかどうかわからない、あるいは答えがあるにしてもその答えを誰も知らない、また答えが得られるまでのくらくらいかかるかはつきりわからない、そのような問題に挑戦することになります。今皆さんはこのような世界の入り口にいるのです。このような学問、あるいは科学の研究の世界で求められるのは、答えを得るための論理的な思考、また簡単にあきらめない心かと思います。

新たな知を生み出すことが 求められる博士論文

もし、あなたが大学院で博士課程に進学したとすると、典型的には3年間で博士論文を書くことになります。博士論文では、新しい学問的、科学的成果があること、すなわち新たな知を生み出すことが求められます。つまり3年かかってもよいから、今まで誰も知らなかったことを何か見つけなさいということです。皆さんが今まで経験してきたことは全く違う知的活動です。また、私に関して言えば、博士の学位を取得して半年くらいで、カミオカンデという実験装置で観測されていた大気ニュートリノのデータが予想と違って少ないということに気づき、その後10年以



特別荣誉教授

梶田 隆章

上研究を続け、結局ニュートリノ振動というニュートリノに小さい質量があると起こる現象が観測されていたのだと結論することができました。でも、10年で解決できたのは幸運だったと思います。同じニュートリノの分野で、太陽ニュートリノの研究を例に取りましょう。太陽ニュートリノの観測はすでに1960年代にはじまったのですが、当時から観測された太陽ニュートリノの数が理論計算の結果より少ないということが問題になっていました。結局、太陽ニュートリノの観測数が少ない理由はニュートリノ振動だったのですが、このことがわかったのは2000年代になってからです。実に30年以上の年月がかかりました。この間、世界の研究者がさまざまなアイデアを出して議論をし、またいくつかの重要な実験がなされ、やっと問題が解決できたのです。このような長い年月をかけて真理に近づくことが求められるのです。



今、世界の研究者がさまざまなアイデアを出して議論したと言いましたが、このことも重要です。今まで皆さんは個人で試験に挑んで、自分の力で回答を書てきました。もちろん、自分の力で回答を得ることは重要です。しかし、あなたの周りの人はあなたが知らないことを知っているかもしれないし、別なアイデアを持っているかもしれません。学問の世界では、世界中の多くの学者、研究者が同じ問題を議論し、知識とアイデアを出しあい、協力して問題の解決に向けて進みます。実社会でも同じかと思ひます。つまり、議論し、協力しながら物事に取り組むことが非常に重要なのです。特に私が関わってきた観測研究では、典型的に100人くらいで協力して観測装置を作り、そして観測、データ解析をして研究成果をまとめます。大学生になった皆さんは意識して議論する力、協力してものごとを進める力を養ってもらいたいと思ひます。そして協力してものごとを進めるため

には、あなたがた1人ひとりが今まで以上に他人から信頼され、尊敬される人間に成長することも求められると思ひます。

今後どんなことが問題や課題になるかを見抜く力を

高校までは問題が与えられて、それを解くことが重要だったかと思ひますが、これから問題や課題そのものを見つけることも重要になってきます。私のことばかりを例に出して恐縮ですが、大気ニュートリノのデータが予想と違うという点を問題としてきちんと認識したことが後にニュートリノ振動の発見につながったと思ひます。学問や実社会の最先端に立つと、今後どんなことが問題や課題になるかを見抜く力、あるいは予期せぬことに会ったときにそれをきちんと問題としてとらえる力が必要になります。問題や課題を見つけるという意識を持って、それらを見つける力を身につけてください。

以上、いくつかの点について、私が思うことを言わせてもらいました。今皆さんは大学生として学問の入り口に立ったのです。今までの勉強とは大きく異なります。大学生の間に皆さんが身につけることは、将来学問や研究の世界に進むか、実社会で活躍するかに関わらず非常に重要なものと思ひます。大学生の時を有意義に過ごしてください。そしてそのような意識を持って大学生活を送る皆さんにとって、東京大学は最高の場所だと思ひます。皆さんにとって東京大学での大学生活がかけがえのないこととなることを、心より期待しています。

入学生総代宣誓

文科Ⅱ類
湯谷猛磨さん



やわらかな春風に心華やぐ季節を迎えたよき日に、平成28年度東京大学入学式に出席できますことを大変嬉しく思ひます。

私たち新入生は東京大学に合格し、スタートラインに立つことができました。しかしこのことに満足することなく、より先を見据えて積極的に行動していく姿勢が必要になります。前期課程では一つの範囲に限定することなく、様々な分野を学んで多角的な視点を取り入れ、後期課程につ

ながるよう、勉学に励んでいく所存です。私たちには先人の知恵を踏襲するだけでなく、さらにその先を切り開こうという姿勢も不可欠と考えます。また大学生活で得たものをその後の人生の糧とすることで、学業面にとどまらず様々な面で成熟した人間になれるよう研鑽を積んでいきたいと思ひます。

私たち新入生はまだ未熟な点ばかりです。これからこの大学で今まで会ったことのない多様性のある仲間たちと切磋琢磨し、五神総長をはじめとした先生方から様々なことを吸収し、目的意識を持って日々進歩していくことを考えています。また、この場をお借りしてこれまで支えてくださった、家族や先生方をはじめ

とする周りの人々に感謝の意を表したいと思ひます。

現代社会では国境や世代を超える様々な課題が生まれています。その強制的な解決を目指してリーダーシップを発揮し、自らの意思で社会を良い方向に切り拓いて行けるよう、日々精進していくことをここに誓ひ、新入生の挨拶とさせていただきます。

東京大学の歌

「大空と」

作詞・北原白秋 作曲・山田耕筰

大空と 澄みわたる淡青
 巖たり我が旗 高く開かん
 仰げよ梢を 銀杏のこの道
 蘊奥の窮理 応じて更に
 人格の陶冶 ここに薫る
 栄光の学府 巍々たり赤門
 我が赤門 高く開かん

大空と 新しき淡青
 冴えたり我が旗 風と光らん
 楽しめ季節を 思慮あれこの道
 文明の証 自由と常に
 甚深の調和 ここに明る
 精神の学府 満ちたり赤門
 我が赤門 風と光らん

大空と 揺り動く淡青
 生きたり我が旗 雲と興らん
 羽ばたけ搏力 どよめよこの道
 青春の笑い 爆けてすでに
 健腕の矜 ここに躍る
 堂々の学府 鏗たり赤門
 我が赤門 雲と興らん



平成 28 年度大学院入学式 総長式辞

本日ここに東京大学大学院に入学された皆さん、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

本年4月に東京大学大学院へ入学したのは、修士課程が2,860名、博士課程が1,243名、専門職学位課程が345名、合計4,448名です。皆さんは、これから始まる、研究と学びへの期待に胸を膨らませていることと思います。東京大学大学院は、規模、学問分野の幅、研究水準の三点において、世界有数の大学院です。この恵まれた環境を存分に活用して、学問に懸ける夢を育み、それを叶えて下さい。私たち教職員は、皆さんの夢の実現を全力でサポートしたいと思っています。

さて、東日本大震災から丸5年が経ちました。皆さんの中にも、被災地出身の方あるいは知人や親戚が罹災された方がおられるでしょう。震災を経験し、復旧と復興の中で、困難を乗り越えて勉学に励まれたことに敬意を表します。これまで東京大学の多くの教職員や学生諸君も、さまざまな復興支援の活動に参加してまいりました。私は昨年4月に総長に就任致しましたが、8月末に、被災した岩手県大槌町にある大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターを視察し、大槌町の市街地域、陸前高田市、後方支援の拠点となった遠野市を訪問致しました。大規模な土盛り工事が進められてはいるものの、街が以前の活気を取り戻すにはまだまだ多くの知恵と忍耐が必要だと感じました。私たちはこの事を心にしっかり留めて置かねばなりません。東京大学は復興支援の活動をこれからも続けていきます。皆さんも学業の傍ら、この復興支援の輪にぜひ加わって下さい。

私は、本日午前中に行われた学部入学式で、新入生の皆さんに対して、新しい知を創造し、知をもって人類社会に貢献し、行動する人材、すなわち、「知のプロフェッショナル」となるよう努力と挑戦を続けてほしいと伝えました。そのために、特に次の3つの力を鍛えてほしいと強調しました。「自ら新しい発想を生み出す力」、あきらめず「忍耐強く考え続ける力」、そして「自ら原理に立ち戻って考

える力」です。

この基礎力をもとに、知を創造し、そこから価値を生み出すには、他者に心を砕き、知恵を出し合っ一緒に行動することが必要です。そのためには「多様性を尊重する精神」と自分の立ち位置を見据える「自らを相対化できる広い視野」を持つことが必要であると述べました。

大学院生となった皆さんには、こうした力に一層磨きをかけ、実際に行動することで、「知のプロフェッショナル」として大きく成長してほしいのです。まさにこれからが本番です。自信と勇気をもって前に進んで下さい。

東京大学は本日、創立139周年を迎えました。創立以来、アジアの地にあつて、東西両洋の学術を基礎としながら、独自の学問を培ってきました。私は総長に就任して以来、学内の幅広い分野の先生方とお会いする機会が多くなりました。運営にたずさわる傍らで、東京大学が創りあげてきた広くて深い学問に触れることが楽しみになっています。

なかでも、歴史、文学や言語の研究は比類のない蓄積があり、東京大学が独自に長年育んできた文化の中で、とりわけ重要な役割を担っていると私は感じています。グローバル化が進む中で、知の多様性は、人類社会の安定性を保つための鍵となるのです。

奈良時代には母音が8だったことを唱えた橋本進吉先生

ここで、私が感動した東京大学での深い学問の例を紹介したいと思います。それは私達がいま話し、聞き分けている日本語という言葉に関する研究です。

現在、日本語はアイウエオという5つの母音を持っています。それが、奈良時代には、母音が8つ存在していたという説があることを皆さんはご存じでしょうか。奈良時代には、もちろんレコーダーなど音声を記録する機器



東京大学総長

五神 真

は全くなかったので、昔の人々がどんな発音をしていたのかを直接に知ることはできません。では、どうやってそのような結論を導くことが出来たのでしょうか。

私たちの東京大学で国語学を研究していた橋本進吉先生がこの説を立てたのです。橋本先生は、皆さんが中学や高校の国語の授業で習う「文節」という概念を提唱し、日本語の文法を体系づけた研究者として有名です。いまから百年ほど前に、文学部の国語研究室の助手として万葉仮名の研究を進めていました。そして『万葉集』や『古事記』などの奈良時代の文献に仮名として使用される漢字の中で、五十音図のイ段・エ段・オ段の音のいくつか、明確な使い分けがあることに気付きました。同じ音を表すものであっても、単語によって表記される漢字に使い分けがあるという事実を見出したのです。たとえば太陽の光である「ひ」と燃える「ひ」は、現代では発音が同じです。音が同じなので、語源は共通なのではないかとする説もありました。しかし、橋本先生の研究によって、かつては発音が異なっていた可能性が明らかになり、もとは別々の言葉であったと推定できるようになったのです。

注目すべきは、大正から昭和初期にかけてのこの橋本先生の独自の調査研究の過程で、実は埋もれていた江戸時代の先駆的な研究が発掘され、新たに評価されたということです。本居宣長は『古事記』の万葉仮名について調べ、文字使用上の区別があることを早くに述べていました。その宣長の研究を受け継いだ



弟子の石塚龍磨は『日本書紀』『古事記』『万葉集』の調査を行い、橋本先生が見い出したことと近い事実に気付いていたのです。石塚はその調査結果を『仮字遣奥山路』(かなづかいおくのやまみち)という書物に残しました。しかし、これは、出版されなかったために、人々に広く知られることはありませんでした。また、石塚自身も、発見したことの意味をよく見抜けず、事実の整理も不十分であったと言われていました。ところが、本学文学部の国語研究室にこの石塚の著書の写本が所蔵されており、百年以上を経て、橋本先生によって読まれ、先行研究として検証され、ようやくその指摘の重要性が理解されたのです。橋本先生は、ご自身の研究について、二重の意味における発見をしたのだと述べられています。ひとつは特殊な仮名遣いを再発見したこと、そしてもうひとつは石塚龍磨の隠れた仮名遣い研究の発見です。

言葉は人間の知的な探究の作業をささえると共に、その結果を時代を超えて伝える媒体です。言葉の変化を分析し、その歴史を把握することは、過去の社会の様子や人々の思想を正確に知るための手がかりとなるのです。そして文書資料に正しいタイムスタンプを与えるという重要な意義もあるのです。歴史の順序や地域の交流の変遷を知る基盤となるものなのです。

論理的思考の重要性と 学問研究の時間的スケール

さて、いま一例としてあげた橋本先生の研究は、大学で学ぶべき学問について2つの重要なメッセージを含んでいると思います。

第一は、論理的思考の重要性です。研究には2つのステップがあります。最初は、調査や実験によって得られたデータを集積して分析し、ある現象が起こっていることを発見することです。次は、見つけた現象について論理的に考察を重ね、背景にあるこれまで誰も知らなかった原理をあぶり出し、体系を説き明かす学説にまとめるという段階です。これらのステップを経て、新たな知恵として人類が共有できるようになるのです。

江戸時代の石塚龍磨は第一の段階にとどまっていたということになります。橋本先生は使い分けのある漢字を甲類・乙類として整理し分析することで、その背景にある音韻の違

いを論証されたのです。この学説がさらに日本語の起源や系統についての研究へと大きく発展していったことを考えると、事実の発見にとどまらず、論理的思考によって新たな体系を示すことの大切さが示唆されているといえるでしょう。

第二のメッセージは、学問研究の時間スケールです。学問を通じた、人類社会への問いかけは、私たちが生きているその時々のお社会にとどまるものではありません。橋本先生の調査と分析は、千年以上をさかのぼる記紀万葉の時代を対象としつつ、過去から未来への言葉の連続や断絶を探るものでした。さらにその過程で江戸時代の研究に出会い、埋もれていた膨大な研究を発掘し、その価値を再発見し、先人の研究に新たな生命を吹き込んだのです。

このエピソードは、過去から未来に流れる永い時間スケールの中で、時を超越した真理の深淵を探究することにこそ学問の真の魅力があるということを伝えているのです。過去を調べるということは、たんに昔を振り返るということではなく、未来の姿を予言し見通すということにつながるのです。これこそが学問の普遍的な使命だと私は考えます。

永い時間スケールの営みを維持することにも、われわれのたゆまぬ努力が必要です。残念なことに、国語研究室に所蔵されていた『仮字遣奥山路』(かなづかいおくのやまみち)の貴重な写本は大正12年の関東大震災で焼失してしまいました。現在では橋本先生が震災以前に筆写された本が残されています。また第二次世界大戦末期には、大学が所蔵する貴重な書物や文化財をトラックや馬車、大八車などに載せて山梨県や長野県まで疎開させ、空襲からなんとか守ったという話も伝わっています。書物を後世に伝えるために先人たちが大変苦労されたからこそ、いまの私たちがそのデジタル化を行なうことができるのです。東京大学の伝統とは、こうして先達の献身によって守り受け継がれたものであることを覚えておかねばなりません。現在、本郷

キャンパスでは、濱田純一前総長の決断により、地下40メートルの大規模書庫建設が進められています。これもこの伝統を引き継ぐための事業であると私は考えています。

ノーベル賞に結実したのは 大学院時代の梶田先生の研究

さて、もう一人、「知のプロフェッショナル」について紹介したいと思います。午前中の学部の入学式で祝辞を頂いた東京大学宇宙線研究所長の梶田隆章先生です。ご存じのように梶田先生は、昨年秋、ノーベル物理学賞を受賞されました。梶田先生の受賞は、岐阜県の神岡鉱山に建設したスーパーカミオカンデを使って、ニュートリノが質量を持つことを証明した成果が評価されたものです。これは、20世紀後半に完成したと思われる素粒子物理学の「標準理論」というものの限界を明らかにする画期的な成果です。

梶田先生は大学院修士課程に入学して小柴昌俊先生の研究室に入ります。そして、ちょうどその頃開始された、スーパーカミオカンデの前身のカミオカンデでの実験に参加しました。カミオカンデという名前はKamioka Neutron Decay Experimentすなわち核子崩壊実験、という意味です。当時の素粒子理論の最先端の研究により、物質は永久不滅ではなく寿命は有限だと考えられるようになりました。そこで、小柴先生達は、物質の基本要素である、陽子などの核子が崩壊する様子を実験で捉えるプロジェクトを開始したのです。何しろ、物質は不滅と思われていたのですから、陽子のごくごくまれにしか崩壊しません。その信号を捉えるのは大変難しいのです。ニュートリノの信号はその計測のじゃまをするので、丁寧に取り除く必要がありました。当時、大学院生の梶田先生はその地道な作業を続ける中で、大気で発生するニュートリノの信号の性質を丹念に調べていました。その中で、おやっと感じる異常に気がついたと言うのです。それが発端となり、ニュートリノ研





究が梶田先生のライフワークとなったのです。このように、大学院時代の研究がノーベル賞につながったという例は沢山あります。一昨年ノーベル賞を受賞された名古屋大学の天野浩先生も青色発光ダイオードの開発は大学院生時代からのテーマでした。本日、大学院の門をくぐったばかりの皆さんもぜひ大きな夢をもって研究に取り組んで下さい。

ニュートリノの実験は、前例のない大がかりな装置による壮大なプロジェクトです。小柴先生、戸塚洋二先生、そして梶田先生へと受け継がれ、国内外の研究者や大学院生の協働はすでに40年近くに及んでいます。この成功の背景には、この間に日本が豊かになり、かつ平和を維持できたことがあるのです。梶田先生の発見は、すぐに何かに役立つというものではありません。梶田先生の言葉をお借りすれば、「人類の知の地平線を拡大する」研究です。このような、真理の深淵を長期間にわたり探究し続ける自由が与えられたこと、すなわち自由な学問活動に対して、国民からの付託が途切れなかったということの価値を私たちはしっかり心に留めておく必要があります。

以上、二人の先輩の研究を紹介しました。どちらも、既存の概念に囚われずに発想を転換し、忍耐強く課題に取り組み続けた結果です。そうして生み出される研究成果が人々を感動させ、世の中の見方を変え、パラダイムシフトへと導くことが可能になるのです。

3月に行われた大学院の学位記授与式で、修了生の代表による答辞に、「大学院の日々は、私にとってはかけがえのない、贅沢で貴

重な時間でした」との言葉がありました。そうですね、大学院生の特権は、自分の意思で使える時間がふんだんにあるということです。後に振り返るとその貴重さがわかります。皆さんには、ぜひその時間を大切に、学問を創る喜びを満喫し、研究する人生のもつ素晴らしい魅力を感じて頂きたいのです。

社会を変革する駆動力を生み出すのが東大の責務

さて、ここでその学問に求められている課題についても少し触れておきたいと思います。20世紀は科学の世紀と呼ばれ、自然科学は飛躍的に進歩し革新的な技術が次々に生まれました。その結果、人類の活動規模は飛躍的に拡大しました。人々は国境を越えて活動し、世界中の出来事を瞬時に知ることもできるようになりました。しかし一方で、人間の行為が地球そのものに回復困難な変化をもたらさし、人類の存続をも脅かすものになっています。宗教的な対立や国際紛争の複雑化は加速するばかりです。人類が英知を絞り、長い年月をかけて生み出した、資本主義や民主主義という社会を動かす基本的な仕組みにおいても、その制御が追い付かず、格差の拡大など不安定性は拡大しています。安定で平穏な世界を構築するためには、人類の英知が駆動する新たな社会や経済の仕組みを考え出すことが必要なのです。東京大学は東京大学憲章にあるように世界の公共性への奉仕を誓っています。この新しい仕組みを提案し、率先して行動し、社会を変革する駆動力を生み出すことが、東京大学の責務であると、私は考えています。

私は大学院を改革し強化することが喫緊の課題だと捉えています。皆さんの学びを支援するプログラムもいろいろ用意しています。ぜひ積極的に活用して下さい。また、社会を大きく変えていくためには、教員、学生、社会人の多様な人々が、大きなビジョンを共有し、世代や組織を超えて深く混ざり合って協力して働くことが必要です。そのために「知の協創の拠点」を創っていきます。さらに、皆さんが「研究する人生」に魅力を感じることができるよう、研究者の雇用環境の改善にも努めていきます。

大学で学び、研究する私たちが果たすべき役割は、先人たちのたゆまぬ努力の中で蓄積されてきた成果を継承しつつ、さらに学問を深めて新たな価値を創造し、変革し続ける社会をうまく駆動させる知恵を生み出すことにあります。東京大学ではさまざまな分野で世界最先端の研究が進められています。そして、伝統によって築かれた豊富な蓄積もあります。私は21世紀を担う皆さんと共にその現場に立てることを、幸運だと思っています。共に夢を抱きながら課題の解決に挑戦し続け、新たな価値や伝統を一緒に創り出していきましょう。

最後になりますが、皆さんが、他者に心を砕き、知恵を出し合って行動し、人類社会に貢献する「知のプロフェッショナル」となるためには、皆さん自身の心身の健康が第一です。大学院生の生活は不規則になりがちです。毎日の朝ご飯をしっかり食べ、規則正しい生活を心がけて下さい。そして、研究のあいまに時間を見つけ、自分に適した形で、運動をする習慣を身につけてください。

皆さんが元気に活躍されることを期待しています。

研究科長式辞

東京大学大学院に入学および進学された皆さん、本日は本当におめでとうございます。また、入学された方、進学された方のご家族や関係者の皆様もさぞお喜びのことと思います。心からお祝いを申し上げます。

これから皆さんは、それぞれ修士課程、専門職学位課程、そして博士課程において、それぞれの課程に応じた能力を培うことを目指して、研究に取り組んで行かれることになり

文・理を問わず様々な分野で 新課題が次々と登場している

私自身の専攻分野は、社会保障法・労働法です。この分野では、次々と新しい問題が提起されています。それは、一つには今日、わが国の産業構造や企業の経営戦略を根底から揺り動かしている国際化の進行の影響です。また労働市場の世代別構成や社会保障制度に密接に関係する人口構造を大きく変える少子高齢化の進展も原因です。さらには、これらに伴って進んでいるいわゆる非正規従業員、とりわけパートタイム労働者の急速な増加等とも結びついています。これ以外にも新たな課題をもたらす種々の要因が存在します。こうした外的環境の変化によって、さらには新たな研究成果の蓄積によって、新しい課題が続々と登場することは、社会保障法や労働法の分野だけではなく、文系、理系を問わず、それぞれの専門分野で起きています。皆さんのような新進気鋭の大学院生がこうした新しい課題にチャレンジしたいと考えるのは当然です。また学問の発展はそうしたチャレンジングな試みによって支えられています。

ただ、私が専攻する社会保障法・労働法の分野でも同様なのですが、ある新しい課題を表面的に追いかけるにとどまると、研究成果の寿命は短くなります。取り上げた課題によって代わる新しい課題が登場すると、その価値は大きく下がり、引用等もされなくなつて

しまいます。たとえば国内のものでも、外国のものでもよいのですが、社会保障法や労働法の分野で新しい立法ができ、それをテーマとして設定したとき、研究の対象がまずはその立法の内容がどのようなものかを明らかにすることになるのはごく自然です。しかし、重要なのはそこではありません。私自身への自戒の意味も込めて申し上げますと、なぜそのような内容の立法が制定されたのか、また、なぜその立法の内容はそのようなものになったのかをことごとく調べ、分析することこそが重要なことです。テーマを深く掘り下げ、幅広く資料等を漁り、徹底的に考え、分析することによって、取り上げたのが小さな立法であっても、その奥に潜む、たとえば社会構造の大きな変化の発見に至るということがあります。そうした発見は、既存の理論の根底からの見直しにまでつながりうる可能性を持っています。研究の醍醐味は、まさにここにあると私は思います。皆さんにも、本学の大学院でこのような研究の醍醐味をぜひ味わってほしいと思います。

基本に立ち返って考えることが 問題の核心の把握を可能にする

皆さんの中には、修士課程修了後または専門職学位課程修了後に社会に出るつもりの方もいらっしゃるでしょう。また、修士課程修了後または専門職学位課程修了後にはさらに博士課程への進学を考えている方もいらっしゃるでしょうし、博士課程に入進学された方は将来それぞれの専門分野で研究者になることを考えている方が多いと思います。将来、どのような進路に進んでも、皆さんは、未知の問題、まだ解決策の見つかっていない課題に直面することでしょう。本学の大学院で研究を行って各界の仕事に就くことになる皆さんの場合はなおさらです。私の専攻する社会保障法や労働法でも同様ですが、そのときに肝要なのは、基本に立ち返って考えることで



法学政治学研究科長

岩村正彦

す。そのことによって、その問題の核心を把握し、それに立脚した解決策等を考えることが可能となります。これは他の専門分野でも同じだと思います。そして、このような課題解決へのアプローチは、先ほど申し上げた研究への取り組み方と共通するところがあります。ですので、本学の大学院での真摯な研究は将来の皆さんの各界での仕事に必ず生きる

と私は信じています。本学の大学院での学生生活は、心身の健康があつてこそです。皆さん、くれぐれも心身の健康には十分に配慮して下さい。そして、皆さんがこれから充実した学生生活を送り、十分な成果を挙げられることを心から祈念しています。

東京大学の歌
「ただ一つ」
作詞・大森幸夫 作曲・山口琢磨

ただ一つ 旗かげ高し
いまかがやける 深空の光
天龍を 負える子ら 友よ 友
ここなる丘に 東大の旗立てり
伝統の旗 東大の光
たたえ たたえん たたえ たたえん

ただ一つ 歌ごえ高し
いまなりわたる 疾風の力
双眼の 澄める子ら 友よ 友
ここなる杜に 東大の歌湧けり
伝統の歌 東大の力
たたえ たたえん たたえ たたえん



祝辞

平成28年度、2016年春の東大大学院への入学・進学の皆さん、皆さんの古い先輩の一人として心からのお祝いを申しあげます。文系、理系を問わず、日本人、外国人の国籍を問わず、皆さんの身も心も、今日は、これまでの自分の勉学の成果への自信と、これからの研究者としての自分の新しい展開への期待と不安とで、いっぱいになり、なにか武者震いのようなものさえ感じていらっしゃるのでしょうか。この壇上に招かれて、四千何百人かの新しい「選ばれた人々」、つまり日本の最高学府の一つに加わった若いエリートたちの顔を見わたして、私も実に嬉しく頼もしく思っている次第です。皆さん、知的エリートとしての重大な責任を世界に対し、自分の国の同胞たちに対し、これから十分に果してゆかねばならぬことを、けっして忘れないでお励み下さい。

私自身の経験についてまずお話しすれば、私は完全な駒場っ児であり、自称「駒場学派」の一人でした。昭和23年、1948年、つまり日本敗戦から三年目の春に、駒場にあった旧制第一高等学校文科に入学しました。戦災で、まだ見ぬギリシャの廃墟のように崩れた教室の柱や壁が立ち並ぶキャンパスでしたが、銀杏並木はすでに青々と芽生えていました。私はそこを、同じ中学から同じ四修で入学した同級生六名と肩を組んで、おぼえたての寮歌を繰り返し歌いながら、一晚中往復したことを、いまもあざやかに、なつかしく思い出します。

旧制一高の最後の生徒から 新制東大の第一回生へ

ところが、私たちの誇らしい一高生としての駒場寮生活はわずか1年で終り、翌昭和24年には同じキャンパスに浦和高校や東京高校も合併されて、新制の東京大学教養学部が発足し、私たちはまたも入試を受けて一ぺんに東大生となることになりました。さらにその2年後の1951年には、教養学部の後期課程として教養学科 (Department of Liberal Arts) が設けられ、その中に、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、国際関係論、文化人類学、科学史科学哲学と、当時の日本の国公立大学にはまだどこにもない新構想の分科が開設されたのですから、まことに目まぐるしい。私は本郷に移るか、駒場にとまるか、いくらか悩んだ末に、この新奇な冒

険的な構想に惹かれて、同窓の高階秀爾、平川祐弘とともにフランス分科に進学しました。

そしてまたも二年後、昭和28年、1953年には、「教養学士」という珍しい学士号を貰った上で、この教養学科に対応して駒場に創設された大学院、比較文学比較文化、国際関係論、科学史科学哲学、文化人類学等、これも日本では前代未聞の専攻課程のうち、私は比較文学比較文化を選んで入学しました。その博士課程時代に2年ほどフランス政府給費留学生としてパリに留学して帰国すると、またも同じ課程に居候をし、昭和38年、1963年にはじめて定職を得て、教養学部のフランス語の教師となりました。さらに数年後、アメリカ・プリンストン大学の東アジア研究科で2年間客員研究員としての勉強を終えて帰ってから、比較文学比較文化の大学院をも担当することにもなりました。

こうして振り返ってみると、17歳で駒場に來てから、平成4年、1992年60歳の定年まで、途中一年だけの無籍の年を除いて、計43年間一貫して私は駒場でお世話になったこととなります。かけかえのない、有難い、充実した学徒、研究者、教育者としての歲月でした。戦後、一年おき、二年おきで、目の前に真新しい学部、学科、大学院がつぎつぎに開かれ、まだ誰も踏んだことのないその学びの道を、旧制一高では最後の生徒として、新制東大ではつねに第一回生として進んでくるのができたのは、当時のGHQの教育改革の拙速ぶりのおかげだったのでしょうか。いや、やはりそれよりも、当時の駒場に集結しておられた矢内原忠雄学部長をはじめ諸先生方の、この混乱を利用した行政上の智慧と、旧制高校の文理にわたる人文主義、古典主義のよさをぜひ新制駒場の知的国際主義の中に伝え、生かそうとした必死の志と努力のおかげであつたでしょう。

ドイツ語の竹山道雄先生は、名作『ビルマの堅琴』を発表なさって間もない頃でしたが、一高文乙のクラスで、週二回ないし三回のドイツ語初歩の文法の授業の合間合間に、好奇心



本学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授・静岡県立美術館館長

芳賀 徹 さん

に燃える私たちに、実に美しいドイツ語でゲーテの「すべての峰にいこひあり」の「旅人の夜の歌」や「君よ知るやかなたへ／君とともにゆかまし」の「ミニヨンの歌」などを黒板に書き、朗々と読んで訳して下さった。

島田謹二先生が朗読した詩に 戦慄を覚えた 68年前

台北大学から引き揚げてきて間もない英語、比較文学の教授の島田謹二先生は、一高の授業が当時午前中しかなかったのを幸いに、午後の空いた時間と教室で超満員の弊衣破帽の一高生たちを相手に私設セミナーを続けられました。自ら編纂した『花さぶび』という近代日本詩歌アンソロジーをテキストに、北村透谷、島崎藤村から与謝野鉄幹、晶子をへて萩原朔太郎や石上(いそのかみ)露子(つゆこ)、佐藤春夫にいたる名詩名歌を教えて下さった。その中に森鷗外、上田敏、永井荷風などの西洋近代の名詩の名訳が入っているのは、いかにも比較文学者らしい新工夫でしたが、中でも英国19世紀末のラファエル前派の画家にして詩人、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの詩「春の貢」を上田敏訳で朗読し読解して下さったときなどの私たちの戦慄は、68年後のいまでも忘れることができません。最終節のほんの2、3行だけでも引いてみますと――

仰ぎて眼(まなこ)閉ち給へ、いざくちづけむ
君が面(おも)、水(みず)枝(え)小枝(こえだ)にみ
ちわたる「春」をまなびて、わが恋よ、



温かき喉(のど)、熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは…

後に島田節(ぶし)と称される独特の抑揚と熱っぽさでこれを読み聞かせられると、まだ「くちづけ」も「恋」も、まして「温かき喉」などはなにも知らぬ十七歳の少年は、まるで魔薬でも注ぎこまれたかのように心身ともに熱くなり、くらくらと目眩いのようなものを覚えずにはいられなかったのです。

戦争真唯中の中学生時代には、西洋の詩文など一切習ったことはありませんでしたし、昭和23、24年代の私たちは、明治中期の青少年たちと同じような西洋文明への第二の開国を経験していたとも言えるのでしょう。それも知識としてだけではなく、官能、感性の奥底までひびくような強さと甘美さをもって。

「ここはちょっと飛ばしましょ」と麻生磯次先生に誘惑されて

矢内原先生の後任で第二代学部長を務められた国文学の麻生磯次先生は、教養学部では芭蕉の俳諧を教えられ、教養学科の基礎科目では西鶴の「好色一代女」をテキストにして、屏風の陰で男女が云々のあやしいところに来ると、「ここはちょっと飛ばしましょ」と上手に品よく省略して、かえて私たちに誘惑なさいました。同じく万葉集の五味智(とも)英(ひで)先生は、大教室中にひびくような声で、山部赤人の「ぬばたまの夜の更けぬれば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」などと朗詠なさっては、「どうだ、いいだろう」と言い放ち、ほんとうに若い私たちを感動させました。

そして教養学科フランス分科の初代主任教授前田陽一先生となれば、世界に知られたパスカル博士。進学して間もない私たちに、パスカルの『パンセ』をもちろんフランス語で読み、少くとも一章を選んでフランス語で評釈せよとの無理難題まで平気で出された。ラシーヌの悲劇も読ませ、あるときはベルクソンの「古典語教育とボンサンス」という論文を読ませて、フランス人学生にとってのラテン語、ギリシャ学学習と同じく、日本人学生の君たちはフランス語学

習によって、君たちの頭の中にすでに出来上がっている流通語、日常語彙の陳腐凡庸な思考の回路をこわし、そこに新鮮な思考の畝(うね)を掘り起こすことができるのだ、それが外国語学習の本来の意味だ、だから学習後はその外国語など忘れてしまってもいいのだ、と驚くべきことまで教えられた。

外国語でも日本語でも、なるべく古典を選び、辞書を丹念に引いて、その古典のその一節にもっとよく適合する訳語を考え出しながら読んでゆき、その過程が私たちの知力と感受性を開発してくれる最重要の作業なのだとは、internationalisme de l'intelligence知的国際主義を旗印とする駒場の教養学科、また大学院比較文学比較文化の教授たちほぼ全員に共通する意気込みであり、新しいイデオロギーだったのです。これはいま毎日のように目にし、口にするグローバリズムとか、国際理解とかの、政治、経済、産業、情報に偏した用語よりもはるかに一国文化の内実には踏みこんだ重い、痛切な、そして痛快な人文の学の営みを促す言葉でもありました。

私は留学後、駒場の教師の一員となると、東大紛争の前後の頃から、『教養学部報』や『東京大学新聞』などの春のアンケートに「新入生に薦める本」というのをよく求められるようになり、割合まじめにそれに答えておりました。新入生の好む区々たる「方法論」などよりは、学びの道への「態度」こそがまず大事なのではないかとして、私が数回繰返して挙げたのは、本居宣長の『初山(うひやま)踏(ふ)み』、杉田玄白の『蘭学事始』、福沢諭吉の『学問のすゝめ』などの日本近世近代の学問論とともに、その筆頭に18世紀日本の大先哲荻生徂徠(おぎゅうそらい)の『徂徠先生答問書』という一書でした。これは徂徠が羽前鶴岡藩の家老たちに、為政者はいかなる学問を身につけるべきかを問われたのに対し、何回かにわたって、真向から徂徠式のバロック風の文章で答えた興味津々の書簡を集めた書物でした。

いま、ごく簡単に二点に絞って御紹介しますと、一つは為政者として上に立つ者こそ、民衆の

日々の喜びや悲しみ、また男女の間の当然の情愛の機微を知らないで、どうしてよい政治ができようか。朱子学のような「道理にあらくはくするしい」理屈の書物はやめて、まずは日本や中国古来の詩歌や物語を読め。これらは「古(いにしえ)の人のうきにつけ、うれしきにつけうめき出(いだ)したる言(こと)の葉(は)」を集めたもので、これを読むことによって、その土地その時代の人情を知ることができ、「風雅文(ぶん)采(さい)」がおのずから身につく、「洞(ほがらか)に人性に通達すること」が可能になると、まるでフランスのモリスたちのような教養を説きます。

「見聞広く事実に行わたり候を学問と申す事に候」

ついで面白いのは、「天地も活物(かつぶつ)に候。人も活物に候を」縄などと縛りからげたように合理主義で判断してはならないとの論です。「惣じて学問は飛(ひ)耳(に)長目(ちようもく)之道」と、中国の戦国末の思想家荀子(じゅんし)も言っているではないか。自国にいながら異国のことも研究するのは、耳に翼ができて飛行するような仕事だし、今の世に生まれながら数千年も昔のことを今日にみるように調べ理解するのは、まさに長い目ということに他ならない。「されば見聞広く事実に行(ゆき)わたり候を学問と申す事に候」、故に「学問は歴史に極まり候ことに候。」

文科系の教育と学問は、現代のニーズに当たっていない、ゆえに縮小せよ、改革せよなどと文部科学省自身が言いだしているいまの日本に向かって、三百年前の大哲徂徠先生は、なんと耳に痛い、人間必須の学問を説いていることか。彼よりさらに一世紀前のフランスの哲人デカルトが、その『方法叙説』に言う「世界という偉大な書物に学べ」との教養ともひびきあうところがあつて、まことに愉快ではありませんか。私はプリンストンから駒場に帰って、フランス語を教えるかたわら、比較文学比較文化史の研究者としての自分の分野を明治日本の文明開化の歴史から遡って、その源流としての徳川時代の文化史に押しひろげることを考え始めていたときに、この徂徠の書に出会ったのでした。実に嬉しくて、わが意を得たりとばかりに「駒場学派」への道をさらに進みはじめたのでした。

御清聴有難うございました。本郷にくらべてまだ若い60年ほどの歴史しかもたない駒場の、



やがてあの梶田隆章先生のファンタスティックな「スーパーカミオカンデ」にも負けない発展を期待して、私の長きにすぎた祝辞を終えます。

皆さん、すぐれた古典を見つけて熟読し、東京大学には本郷、駒場、柏キャンパスのいす

れを問わず、すぐれた教育者・研究者である先生が大勢いらっしゃるのですから、その先生方について、自国と世界の文化の本体に通じ、また、大自然の本体に通じるエリートとしての責任を明日から十分に果して行って下さい。



入学生総代宣誓

数理学
研究科
森迪也さん



本日は、このような素晴らしい入学式を挙げていただき、心より感謝申し上げます。

私たちは今後、それぞれの所属する研究科において、自らの専攻する分野の研究を進めてゆきます。

私の専攻は数学です。数学の研究の成果は定理という形で後世に残りますが、ひとたび証明された定理はその後永遠に覆ることはありません。これは数学のもつ著しい特徴のひとつです。このように、それぞれの学問が他の学

問にはない特徴を持っているものでしょう。また、同じ学問分野の中でも、たとえば数学にも紙とペンさえあれば研究ができるような抽象的な世界から、コンピューターを用いて数理モデルを構成するような具体的な世界までがあるように、それぞれの研究は、その研究の対象、プロセス、目的など、多くの点で異なっていることでしょう。

しかし、自分の知的好奇心を満たしたい、という純粋な気持ちを持って学術に取り組む点は、すべての研究に共通しています。それぞれの研究は異なっていますが、その対象について知りたい、理解したい、納得したい、明らかにしたい、より良い結果を得たい、真理を追究したいという思いは、学を志す者であれば誰もが持っているに違いありません。

ところで、学術においては社会の役に立つことが求められます。しかし、研究は直ちには社会への貢献につながるとは限りません。研究の分野を越えた交流とその蓄積があったからこそ、人類は発展してきました。たとえば、ある数学の研究が何十年、何百年の後に物理学へ、さらに時を経て工学へ応用され、これらの分野が互いに影響しあいながら成長し、その結果豊かな社会が築かれる、ということが歴史の中で幾度となく繰り返されてきたように。以上のことから、私はこう考えます。知的的好奇心こそがすべての学問の礎であり、研究において最も尊重すべきものであると。そして、研究の分野の枠を越えた叡智の蓄積こそが、社会への貢献につながるのだと。私たち新生にできることは、この叡智を積み重ね

る一員として、日々邁進してゆくことです。

よって私は本学新生を代表して宣誓します。東京大学大学院の学生としての責任と矜持を持ち、先人たちの築き上げた学知に敬意を払い、自らの知への欲を満たすべく、学問に真摯に向き合うことをここに誓います。

最後に、私自身が数理学研究科の学生として、その研究がいつの日か人類の発展につながることを願って、広い視野を持ち、心血を注いで数学を追究することをここに誓い、宣誓の言葉の結びと致します。

式典写真:尾関裕士

topics

新入生に範を示す「知のプロフェッショナル」の先輩たち ～平成27年度「東京大学総長賞」授与～

本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著な団体・個人を対象とする、平成27年度学生表彰「東京大学総長賞」の授与式が、3月23日(水)に小柴ホールで実施されました。総長から表彰状・記念品、お祝いの言葉が贈られた後、各受賞者から成果に関するプレゼンテーションが行われ、本学学生、教職員、受賞者関係者等、約140名が参加して、それぞれの活躍と功績を讃えました。

五神真先生が総長となって初めての表彰となる今年度は、「東京大学総長賞」として、課外活動・社会活動等の分野で、自転車競技の分野で全日本学生選手権個人ロードレース優勝・平成27年度学連ロードランキング1位という輝かしい結果を残した浦佑樹さん(工学部/本誌1470号表紙参照)、

学業分野では、新奇感覚を利用した脳機能を研究した乗本裕明さん(薬学系研究科)が受賞しました。

また、「東京大学総長賞」として、課外活動・社会活動等の分野では、WHOでの活動をはじめとする国際医療分野で卓越した活動を行った上野諒さん(医学部)と、エアバス・ユネスコ共催航空技術コンテスト世界大会で日本チームとして初入賞した「BIRDPORT」(本誌1470号参照)が受賞するとともに、学業分野では、野寄修平さん(医学部)、島周平さん(教養学部)、林川友貴さん(教育学研究科)、安田百合絵さん(人文社会系研究科)、田代貴志さん(理学系研究科)、星野壮登さん(数理学研究科)、小野田実真さん(工学系研究科)、澤田洋平さん(工学系研究科)の8名が受賞しました(受賞内容:右表)。



多様性に富む受賞内容(学業分野:抜粋)

超音波画像提示による新たな点滴用のシステムを開発
1秒未満と1秒以上の時間を処理する脳の仕組みを示唆
学校適応感情や性別役割意識の形成メカニズムを研究
ルソーの自伝的作品『対話』の持つ現代的意義を提示
最古の生物の証拠を38.5億年前から39.5億年前に更新
KPZ方程式などに関するHairer理論の適用限界を示唆
自動振動するアメーバのような高分子溶液創製に成功
アフリカの水不足や食糧生産力の予測システムを構築
地磁気や赤外線などの感覚情報も脳が習得すると証明

ひょうたん島通信

大槌発! 第31回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復興に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



震災から6年目を迎えて～記録を続ける～

2016年3月29日、城山公園体育館より。

福田秀樹 大気海洋研究所
附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

多くの悲しみをもたらした東日本大震災から5年が経ち、復興に向けた歩みも6年目を迎えました。今回、紹介させていただいている写真は、大槌町城山公園体育館の横から大槌町役場旧庁舎方面を写したもので、震災から1年弱の第1回、約3年の第18回、約3年半の第24回で紹介されている写真とほぼ同じ場所を写したものです。第24回のもの比べると、町の中心部のかさ上げが進んでいる様子や、大槌川の向こう岸に民間企業の社屋が増えている様子が見て取れます。大槌町では、この一年で復興に向けた街づくりが急速に進み、新しい街の姿を感じられるようになってきました。

このような風景の変化は残っている写真を比較することで捉えることができますが、全国の研究者が参加している文部科学省の東北マリンサイエンス拠点形成事業では、陸の上からは直接見ることができない海の中の様子を記録しながら、震災が三陸の海に与えた影響を解明しようとしています。私自身は大槌湾を含む三陸沿岸の海水中に溶け込んでいる栄養塩類をはじめとした溶存態・懸濁態物質

の調査に参加していますが、現在の海の状態と震災の間の関連を明らかにするためには震災前後の様々な期間との比較が、やはり有効な手段です。しかしながら震災後の情報に比べて震災前の情報は量的にも質的にも乏しく、調査で日々蓄積していく結果の解析を行いながら、「これは震災の影響だろうか？ それとも稀ではあっても震災とは無関係に生じうる現象だろうか？」という疑問に頭を悩まされると、平時から記録を残していくことの重要性を実感させられます。とは言うものの、限られた労力では、全てを記録することが出来るわけではないのも事実です。海の中の何を優先して記録していくべきなのか？ という疑問に当たった時に、我々の記録と解析の過程がその判



断の助けになれば幸いです。

大気海洋研究所を中心としたチームは、東北マリンサイエンス拠点形成事業での取り組みを一般向けの広報誌「メーユ通信」にて紹介しています。この5年間で分かってきたことをまとめた第5号が以下のサイトからダウンロードできますので、興味のある方は是非ご覧ください（プロジェクトメーユ<http://teams.aori.u-tokyo.ac.jp/> ページ右側の「メーユ通信」バナーをクリック）。

調査船「弥生のつばやき」 薄れゆく静寂の日々の記憶



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

「薄れゆく震災の記憶」が話題となっていますが、被災地に居れば忘れることなどできるはずがありません。どこかへ行く時、誰かと話をする時、常に震災を思い起こします。でも、先日、これと異なる「薄れゆく記憶」に思わず襟を正しました。震災から5年目となる3月11日。ほとんどの工事が中断され、「大槌町東日本大震災津波追悼式」が大々的に執り行われました。穏やかな日差しの中、目を閉じて犠牲者の冥福を祈れば、聞こえてくるのは風と波と葉すれの音だけ。そ

の時、ハッと気がつきました。2013年11月12日に竣工した私には、黒煙を噴き上げるブルドーザーや埃まみれのダンプカーの重々しいエンジン音が当たり前の日常でした。しかし、それは震災から立ち上がろうとする町の悲鳴であり、この清々しい静寂こそが本来の大槌のはずなのです。被災地では人の入れ替わりも激しくなっています。こうした中では震災のみならず、それ以前の姿もしっかりと記憶に留めておくことが必要だと感じました。



小学生の手により震災前の大槌を知るサケたちの子供が放流されました。彼らが戻ってくる4年後、この町はどのような変貌を遂げているのでしょうか。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

集中連載

ビジョンのビジョン

起草メンバー座談会で見るとその背景と展望

第4回／「場」としての言葉の力

鈴木真二（司会／広報室長）○ビジョン4〔運営〕では「場」に着目していますね。

藤井輝夫■場といっても二つあって、物理的な場と、言葉が行き交うことで構成される場があります。

佐藤健二★その象徴のひとつとして図書館がある。理系では現行のジャーナルが主ですが、文系では膨大な文献の蓄積を参照しないとイケません。「森」あるいは「炭坑」としての図書館が必要です。

齋藤希史◆科学の「科」が示すように、サイエンスは基本的に分割して進むものです。一方、文系には分割したものを広い場のなかに置き直して考える役目があります。学術の営みが壮大な知として可視化された図書館は、蓄積された知と未来を展望する時間が共存する場です。

藤井■現在から未来への時間軸のなかで、人が集まり、多様な相互連環が起こるわけですね。

佐藤★言葉自体に歴史が刻まれています。たとえば「実業」は、明治期につくられたbusinessの訳語でした。でも辞書によると、近世まで「じつごう」と読み、仏教の輪廻の「業」の現実的な現れを指した。その共存は辞書しか覚えていませんが、いまは逆に、ビジネスの場でこそ「業」の意味に気づくべきかもしれません。

総長●私がこの議論の中で気づいたのは、言葉の重みが文系は理系とすいぶん違うということです。そうした文系の学術の集積として図書館を捉えたいと思いました。図書館にいと確かに感じる何かがあります。これが文系では本質的な意味を持つかもしれないと気づきました。あと、印象的だったのは明治時代に日本人が多くの言葉をつくったこと。

佐藤★「哲学」「物理」「化学」「社会」……。外来の新概念をどう消化吸収するかで頭を絞ったようですね。

齋藤◆原語のままではなく東洋の漢語に置き換える作業をした。新しい価値創造の場だったと思います。

藤井■アジアから西洋を捉える一つのやり方ですね。

佐藤★英語化だけを進めればいいのか、という問題もあります。たとえば、「文化」=cultureと思いがちですが、cultureはcolereというラテン語に由来し、「カルト」や「コロナリズム」ともつながる。でも「文化」ではそれは見えにくい。言葉によって概念の遠近や位置の描かれ方が違う。場としての言葉の力を考えながら発信する。そこに翻訳の真髄もあるはずだ。

総長●英語に置き換えるだけでなく、日本からオリジナルの価値を発信するという姿勢は、「東京大学ビジョン2020」の一つの肝だと思っています。（つづく）

※1月8日の座談会の抄録です（ロング版は「淡青」32号に掲載）。

あちこちそちこち
東京大学 第9回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

理学系研究科附属
臨海実験所の巻

所長



赤坂甲治

130年の歴史を誇る海洋生物研究施設



1936年に建設された旧本館と、臨海丸（17t、定員25名）。

大学院理学系研究科附属臨海実験所（通称・三崎臨海実験所）は、神奈川県三浦半島の先端にある130年の歴史を誇る海洋生物の研究教育施設です。

三浦の海は世界でも最も海洋生物の種数が多いところ。きれいな海に、栄養塩類が東京湾を経由して少しずつ流れ込むため、適度な量のプランクトンが発生し、それが食べ物となって多くの動物が生息できます。また、地形が複雑なため環境が多様で、それに適応するさまざまな種類の動物が生息しています。さらに、深海がすぐ側にあるため、沿岸で発生するプランクトンの死骸がマリンスノーとなって深海に降り注ぎ、深海生物が繁栄しています。これまでに採集された動物は900種を超えます。この多様な海洋生物を求めて、国内外から多くの研究者や学生が訪れ、滞在して研究教育活動を行っています。

多くの方は、海洋生物の研究施設というと、魚介類の養殖の研究をしていると思われるかもしれませんが、ヒトも含めた生物全体に共通する生命科学や進化の研究を行うところ。マウスなどのモデル動物では実験できない研究も、多様な海洋生物の中から選べば、可能になります。欧米では、医学薬学系の研究者も臨海実験所を訪れ、海洋生物からヒントを得ています。

海の野生生物は採集が困難なものも多くあり、研究者自身では入手できません。研究者のニーズに合わせて、海の特定の生物種を提供できるのは、技術職員の皆さんのおかげです。臨海実験所を訪れて、豊かな海の生物に出会ってみませんか。



1. 学生実習（海底生物の採集）。
2. アカウニの餌となる海藻とニッポンウミシダの採集。
3. パフウニの夜間採集。
4. 小学生対象のアウトリーチ。

<http://www.mmbs.s.u-tokyo.ac.jp>

ワタシのオシゴト 第122回

RELAY COLUMN

工学系・情報理工学系等総務課
東海チーム 専門員

大村 栄

茨城県東海村より



専攻事務室にて。

工学系研究科原子力専攻は、原子力工学教育に必要な原子炉などを管理し原子力工学研究を推進してきた原子力工学研究施設が改組され、平成17年度に発足しました。改組前から茨城県東海村に設置されています。原子炉の名称は「弥生」で、東日本大震災を機に稼働を停止し、現在は廃炉に向けて作業中です。

本専攻には原子力のプロを養成するための専門職大学院が設置されており、十数名の主に社会人が1年間、東海村で勉学に励んでいます。

私の仕事は、この原子力専攻の事務部門の統括です。本専攻が本郷と大きく異なる点は、学外の役所や地元団体との交渉等が多々あるところでしょうか。赴任して1年足らずですが、ベテラン職員の方々に教えてもらいながら業務を行っている日々です。最後になりましたが、いつも思うのは現場を持つ職場は技術職員の存在なくしては成り立たないということです。教員、事務職員との連携・協力は不可欠ですが、現場の一員としてこれを改めて肝に銘じ、職務にあたりたいと思うこの頃です。



自宅のある埼玉県秩父市の武甲山と芝桜。

得意ワザ：料理の手伝い

自分の性格：限りなくAに近いB型

次回執筆者のご指名：新井 烈さん

次回執筆者との関係：秩父演習林でお世話になりました

次回執筆者の紹介：雪上に立つと人格が変わるとか……

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学協創推進本部
(旧・産学連携本部)

第125回

教職員向けの「発明と共同研究と起業についてのガイドブック」公開

国立大学法人化から12年が経過した今、政府による大学改革の一環として本格的な産学官民連携の施策が検討されています。大企業との共同研究、大学発ベンチャー創出、ベンチャー育成支援体制の強化等により、大学における研究力と教育力が「日本の産業構造を変えるような競争とイノベーションの芽」をつくるのがこれまで以上に期待されています。本学産学協創推進本部は、産学官連携活動の活発化・グローバル化等により必然的に想定される個々の課題に対し、これまで以上に効果的かつ適切なマネジメントが求められています。学外と多様な連携が構築される一方で、本学教職員の皆様一人ひとりが、知財や共同研究あるいは研究成果の事業化等に関する遵守すべき基本的な規程類を認識しておくことも肝要となります。大学が産業界と多様なつながりを構築していく中で、研究の社会的信頼 (integrity) を維持・確立していくこと、また研究の客観性 (objectivity in research) 等を組織的に担保していくことは、産学連携活動を加速する上で必要不可欠です。これは決して、規則等により産学官民の連携活動のハードルを上げるためのものではなく、透明性のある実質的な制度設計により、大学における研究の自由を担保し、産学官民との様々な連携に好循環を生み出すための戦略的施策の一環でもあります。産学協創推進本部は、本学教職員向けに「発明と共同研究と起業についてのガイドブック (第1版)」を作成し、公開致しました。発明の権利化、共同研究の組成をはじめ事業化支援に関する施策に関して普段は馴染みのない教職員の皆様も理解して頂ける内容で構成されておりますので、是非ご一読頂けますようお願い申し上げます。また案件ごとに個別相談をご希望される方は、産学協創推進本部並びに各所属部局にお問い合わせください。本ガイドブックにより、産学官民連携活動のさらなる推進に向け関係者皆様の学内における諸手続きが滞りなく遂行されることを願っております。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第105回 バイブル

情報学環 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター部門

佐倉 統

テロと学会

2016年の科学技術コミュニケーション国際会議(PCST)は、4月下旬にトルコのイスタンブールで開催される。この文章をみなさんが読むのは、もう会議が終わったあとだろうか。トルコ開催のニュースを2年前に聞いたときは、うれしかった。未訪問中で行きたい国ベスト1だ。なにより、アジアとヨーロッパの境界に跨がって存在感を発揮し続けてきた国の様子を肌で感じることは、コミュニケーションとは何かについて、得るところも大きいと思ったからだ。

だが、2015年の半ばからトルコではテロ事件が続発、16年1月にはついにイスタンブールでも自爆テロが起こった。死亡者10人、うち9名は観光客だった。こうなってくると、迷いが生じる。結局ぼくは、参加を見送った。何年も前から準備を重ねてきたトルコの実行委員会や関係各位には申し訳ない限りだ。学会のメーリングリストには、直前まで学会長や大会委員長からのメッセージが配信されている。やはり参加者が大きく減っているようだ。

人が移動し、アイデアや知識をやりとりをすることで、研究は進む。これは分野を問わない。だから、研究者が国際学会への参加を躊躇する状況は、学問の敵である。テロは世界と社会とそこで暮す人々にとってだけでなく、知識と文化にとっても憎むべき敵である。

この先の学術研究はどうなっていくのだろうか。世界中を飛行機が飛び交い、人と物が行き来する時代は、ピークを過ぎたのかもしれない。これからは、インターネットでの情報の交換が主流になっていくのだろうか。Skypeでイスタンブールの国際会議に参加できるのなら、是非ともそうしたかった。近い将来、もっとリアルな遠隔会議システムも開発されるだろうか。ロボットをエージェントにして、代わりに参加させることもできるようになるのだろうか。

科学技術コミュニケーション国際会議は隔年開催なので、次は2018年だ。開催国はニュージーランド。その時は、平和に、希望する誰もが参加できる国際情勢になっていることを祈る。そして、祈ることしかできないのがとても辛い。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives
ぶんしょかん



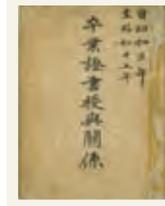
第1回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

●今回の蔵出し資料

「卒業証書授与関係」

大学の式典に関する重要記録の一つ。総長の告辞草稿や、卒業証書授与式(卒業式)の式次第などの記録が綴じられています。



安田講堂での卒業式はいつから?

はじめまして、文書館です。東京大学文書館は2014年、東京大学に関する歴史的資料を管理・活用することで本学の学術多様性を支え、大学の価値向上につながるために設置されました。このコラムでは当館が所蔵する、約140年に及ぶ東京大学の価値ある記録をご紹介します。

さて、東日本大震災後の改修工事期間を経て、昨年からは復活している安田講堂(正式名称は大講堂)での卒業式。読者の皆様はこの起源についてご存じでしょうか? 今回、文書館がお蔵出しするお宝資料は、東京大学が初めて安田講堂で開催した全学卒業式の資料です。

安田講堂は今から遡ること約90年前、1925(大正14)年に完成します。実はこの頃、東京帝国大学では、全学を挙げての卒業式は行われなくなっていました。卒業式の開催は学部任せられ、学部毎に卒業式をやったり、やらなかったりという状況になっていたのです(やらない学部ではただ事務で卒業証書もらうだけ)。安田講堂の建設費用を寄附した安田財閥の祖、安田善次郎は、その寄附目的の1つに、卒業式への利用を掲げていましたが、この願いはすぐには実現しませんでした。安田講堂完成の翌1926年に大正天皇が亡くなり、1927年には大喪(天皇の葬儀)があって、喪に服することになり、新しいお祝い事は控えることになってしまったからです。また、各学部バラバラに卒業式をやっている内に、学部毎の慣例も出来上がってしまっていて、それを統一するのも時間がかかったということもあります。

そんなわけで、安田講堂が出来てから約3年後の1928(昭和3)年になってようやく全学卒業式が安田講堂で初開催されることになったのです。一見、中途半端にもみえる昭和三年から始まるこの資料はまさにその起源を示すものなのです。(文書館特任助教・加藤諭)

東京大学文書館

http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
3月16日	工学系研究科・工学部	東京大学海外ヒストリクラリー参戦プロジェクト2016「TeamMUSASHI」	3月5日
3月17日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム 第6期 履修証授与式	3月2日
3月22日	人文社会系研究科・文学部	平成27年度「文学部冬期特別プログラム」を実施しました	2月13日
3月23日	史料編纂所	東京大学所有(史料編纂所保管)「蔣洲咨文」の重要文化財指定について	3月23日
3月24日	本部総務課	平成27年度学位記授与式を挙行	3月24日
3月24日	政策ビジョン研究センター	リスクとセキュリティ：安全保障研究の新次元 開催報告	1月29日
3月25日	本部総務課	平成27年度卒業式を挙行	3月25日
3月28日	国際本部	第2回戦略的パートナーシップシンポジウム開催	3月14日
3月28日	本部評価・分析課	平成27年度大学機関別認証評価の評価結果について	3月24日
3月30日	カブリ数物連携宇宙研究機構	先端科学と哲学の一般講演会「宇宙観の東西」開催	3月20日
4月1日	情報学環・学際情報学府	東京大学情報学環メディアスタジオが竣工しました	3月24日
4月1日	カブリ数物連携宇宙研究機構	梶田教授ノーベル賞受賞記念連続講演会「私たちはどこから来たのか?」	3月27日
4月4日	産学連携本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」[年次総会]を開催	3月9日
4月5日	教育学研究科・教育学部	グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム	2月22日
4月6日	国際本部	プリンストン大学との戦略的パートナーシップ成果報告イベント Princeton Days の開催	3月17日
4月7日	本部博物館事業課	『梶田隆章先生ノーベル賞受賞記念講演会』および特別公開『梶田隆章先生ノーベル賞受賞』	3月30日
4月12日	本部総務課	平成28年度学部入学式を挙行	4月12日
4月12日	本部総務課	大学院入学式式辞の総長メッセージ ～橋本進吉の例から何を学ぶか～	4月12日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
4月1日	本部人材育成課	人事異動	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動
4月1日	本部広報課	部局長の交代のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00011.html

部局長交代のお知らせ

2016年4月1日付で下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記「お知らせ」のURLをご覧ください。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究所長・法学部長	岩村 正彦	西川 洋一
大学院薬学系研究所長・薬学部長	新井 洋由	嶋田 一夫
大学院数理学研究科長	河野 俊丈	坪井 俊
大学院情報理工学系研究科長	石川 正俊	坂井 修一
大学院公共政策学連携研究部長・教育部長	飯塚 敏晃	城山 英明
宇宙線研究所長	梶田 隆章	(再任)
物性研究所長	瀧川 仁	(再任)
先端科学技術研究センター所長	神崎 亮平	西村 幸夫

第89回 五月祭開催のお知らせ

本郷・弥生キャンパスが舞台となる五月祭は、模擬店や文化系サークルによる展示などのほか、研究展示も盛んであり、アカデミックな雰囲気が魅力です。参加団体は約500、来場者数は15万人超と、全国屈指の規模を誇り、今年は5月14日(土)・15日(日)に開催されます。今回のキャッチコピーは、「東大生に、恋した日。」。ひと口に「東大生」と言っても多種多様な個性を持ち合わせています。五月祭を通じてたくさんの東大生に出会い、彼らに大きな魅力を感じてほしい。そんな想いがこのキャッチコピーには込められています。普段の顔とはひと味違う輝きを見せる東大生たちに恋する自由は教職員にもあるはず!?



<https://gogotsusai.jp/>

CLOSE UP 海外ヒストリックラリーで優勝&準優勝を達成! (工学系研究科・工学部)



表彰式後、袴を着て全員で集合写真。



激走中のオレンジシビック。

東京大学海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト2016の「TeamMUSASHI」が、3月5～6日にニュージーランドにて行われたカーラリーTarga Bambinaのクラシック2WD部門カテゴリ-0で、優勝と準優勝を果たしました (Targa Spirit賞も受賞)。

このプロジェクトは、「創造的ものづくりプロジェクト」「創造性工学プロジェクト」として東京大学とホンダ学園ホンダテクニカルカレッジ関東の両校で開講されている正規授業。車の修繕をはじめスポンサー獲得などの渉外活動や海外大会エントリー手続き、車の海外輸送手

続き、そして現地でのサポートまで、ラリー参戦に必要なことを全て学生が行います。普段の座学だけでは得ることの出来ない貴重な体験を通じて、ものづくりの基礎技術や渉外交渉マネージャー、異文化を学び、グローバルな視点を養っています。慣れない海外の地で、工学部、さらには学校の枠を超えた多様なバックグラウンドを持ったメンバー達が、それぞれの得意分野を活かしながらチーム一丸となって協力できたことが、Targa Bambinaでの成功につながりました。

4月11～16日にはタスマニア島を舞台にしたTarga Tasmaniaにも参戦。その模様も合わせて<http://rallyemusashi.com>でご確認ください。

CLOSE UP 全学の学生が使えるメディアスタジオが竣工 (情報学環・学際情報学府)



クロマキー撮影にも対応しています。正式オープンは6月の予定です。

3月24日、東京大学情報学環メディアスタジオ (Media Studio, iiiUTokyo) が竣工しました。ジャーナリストや映像クリエイターを目指す学生のためのメディア制作スペースです。

情報学環本館7階の約100m²のスペースに、防音性に優れ、クロマキー撮影も可能な「撮影/録音スタジオ」、マルチカメラ収録やライブストリーミング配信にも対応した「調整室」、快適な編集環境を備えた「編集室」が、機能的にレイアウトされています。ビデオカメラ等の貸し出しにも対応しており、東京大学の学生であ

れば、必要なトレーニングを受けることによって、誰でも自由に最先端のリソースを利用できます。また年間を通して、ドキュメンタリー制作やスタジオ番組制作など様々な実習授業を開講するほか、映像制作のスキルを楽しみながら学ぶワークショップやセミナーも開催します。

メディアスタジオは、デジタルメディア時代における東京大学の新情報発信拠点として、放送局やネットメディア、第一線で活躍するジャーナリストや映像クリエイターたちと連携しながら、大学からの情報発信を支援していきます。

CLOSE UP 大学評価基準を満たしていると評価されました (本部評価・分析課)



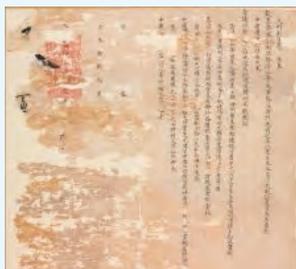
認証評価結果及び自己評価書の閲覧はhttp://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/d05_05_j.htmlで。

東京大学では、平成27年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構が行う大学機関別認証評価を受審し、「大学設置基準をはじめ関係法令に適合し、大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている」との評価を受けました。認証評価とは、文部科学大臣の認証を受けた評価機関が、教育研究活動等の総合的な状況について行う評価で、すべての大学は7年以上ごとに受けることが義務付けられています。

平成28年3月に通知された評価結果では、主な優れた点として、学術俯瞰講義、部局横断型

プログラム、グローバルリーダー育成プログラム、ALESS / ALESA プログラム、「FLY Program」、独自の奨学金制度による経済的支援、国際学生宿舎やインターナショナルロッジ整備等13点が挙げられました。一方、主な改善を要する点として、全学的に教員評価指針に基づいた継続的評価を実施していない点、大学院課程の一部研究科において入学定員超過率が高い又は入学定員充足率が低い点、一部の学部・研究科等で成績評価に疑義がある場合の異議申立て制度が設けられていない点が指摘されました。

CLOSE UP 史料編纂所が所蔵する「^{しょうしゅうしぶん}蔣洲咨文」が重要文化財に (史料編纂所)



5月8日まで東京国立博物館において一般公開中です。

3月11日、文化審議会が文部科学大臣に重要文化財に指定する美術工芸品などについての答申をおこないました。そのなかで史料編纂所が所蔵する「蔣洲咨文」が含まれています。「蔣洲咨文」とは、1556 (嘉靖35) 年11月3日付で、明の使者蔣洲が対馬宗氏に倭寇禁圧を求めた公文書 (咨文とは対等の役所同士がやりとりするさいに用いる様式) です。宗家旧蔵で、1977 (昭和52) 年に書店から本所が購入し、傷みが激しかったため、修復室が全面的に修復しました。

1555年に来日した蔣洲は、倭寇の首魁王直に明への帰国を承諾させ、ともに豊後を訪れて大友氏・大内氏に倭寇禁圧を求めた後、1557年、大友氏の使者等を伴って帰途につきますが、この「咨文」は彼の豊後滞在中に作成されたものです。宗氏から報告があったとして、「朝鮮王朝実録」にも「咨文」が引用されています。後期倭寇の最盛期における外交交渉のなかで発給された外交文書原本であり、対外関係史上、古文書学研究上に貴重であることが評価されました。



重力波天文学誕生

日本時間の2月12日未明、ワシントンDCの記者会見場は満場の拍手につつまれていた。アメリカの重力波検出プロジェクトLIGOの代表であるDave Reitze氏が、“We have detected gravitational waves. We did it!”と高らかに宣言したのである。アインシュタインの一般相対性理論によりその存在を予言された重力波が、100年の時を経てついに見つかった。LIGOで7年間、大学院の時から通算して30年以上、重力波検出実験一筋でやってきた私にとっても、まさに歓喜の瞬間であった。

一般相対性理論によると、物体が存在するとそのまわりの時空がゆがむ。そしてその物体が動くとき空のゆがみが波となって光速で遠方に伝播していく。これが重力波である。逆に、重力波がやってくると、物体間の距離が変化する。したがって、その距離の変化を測ってやれば重力波が検出できるわけである。

LIGOは、1990年台に入って、ワシントン州とルイジアナ州に4kmのアーム長を持つレーザー干渉計型重力波検出器2台を建設した。そして最近の装置の大改造により感度

を上げ、重力波によって引き起こされたわずかに 10^{-21} の空間のゆがみを、2台の検出器でほぼ同時に捉えたのである。観測された重力波の波形の詳しい解析の結果、今回見つかった重力波は、13億光年遠方にある、太陽の30倍ほどの質量を持つブラックホール連星の合体からやってきたことが分かった。

今回の初検出により、重力波を使って宇宙の新しい姿を探るいわゆる重力波天文学が産声を上げたわけであるが、今後は、日本が建設中の大型低温重力波望遠鏡KAGRAも加わり、中性子星連星の合体、超新星爆発、パルサーなどからの重力波を検出し、重力波天文学をますます発展させていくことが期待される。さらに将来は日本が検討しているスペース重力波アンテナDECIGOにより、宇宙誕生後 10^{-34} 秒後頃に発生した重力波を検出することも可能かもしれない。まさに21世紀は重力波天文学の時代である！

川村静児 (宇宙線研究所)